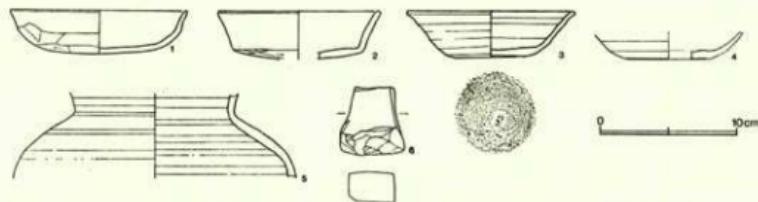


第121図 第56号住居跡・カマド実測図



第122図 第56号住居跡出土遺物実測図

その他の遺物

紡錘車

48 (No. 1) 上部を欠く。石質滑石。32g。斜面部は、面とりされる。

第56号住居跡（第121図・図版31）

第6地点中央部東側に位置する。南側に第57号住居跡が隣接している。

形状は東西方向に長い長方形を呈する。

大きさは3.6m × 2.6m。主軸の方向はN—112°—E。

覆土はローム粒子を含む褐色土が主として堆積していた。

カマドは東壁中央部やや南寄りに壁を70cm程掘り込んでつくられており、底は浅いすり鉢状をし床面より7cm程低く、段を持って立上がる。

床は平坦である。壁高は西側で26cmで垂直に立上がる。

遺物はカマドの底から灰2、カマド前の床面から須恵器3、そして他は床面から5cm程浮いた部分から出土している。

第56号住居跡出土遺物（第122図・図版68）

国分第Ⅲ期に属する。

土器器坏

KⅢ—1類 1 (No. 3) 40%残。皿か？ 淡茶褐色。

KⅢ—3類 2 (カマド内床直) 30%残。淡茶褐色。

須恵器

1 杯

3 (No. 1) 口縁部28%を欠く。器形は歪む。ろくろ水挽き成形。細、粗粒砂含み粗い。硬質。暗灰青色、底外面灰紫色。底部には時計回りの回転糸切り痕。4 (No. 1) 30%残。細粗粒砂含む。焼成良好。灰青色。ろくろ水挽き成形。時計回りの回転糸切り痕。

2 壺

5 (No. 2) 25%残。微細粒砂の他、白色針状物質を含む。焼成は非常に良い。胎土も緻密、暗灰青色。外面に自然釉付着。

砥石

6 (No. 4) 細粒砂岩。90g。下部も使用され、砥面は5面となる。

第57号住居跡（第123・124図・図版32）

第6地点中央部に位置し、西側に第58号、北側に第56号の各住居跡が隣接している。

覆土は多量のロームブロック及び炭化物を含んだ暗褐色土を主とし、壁近くではこれに砂を多く含んだ土層が堆積していた。

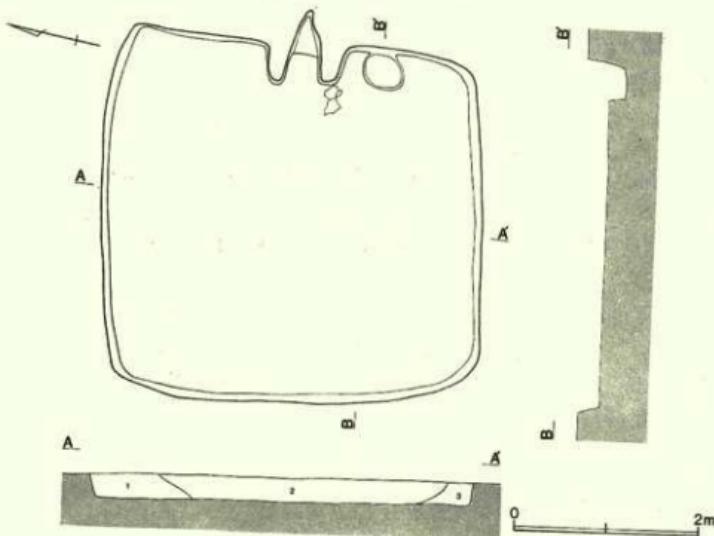
形状はややゆがんだ方形を呈する。

大きさは $3.4 \times 4.1\text{m}$ 。

主軸の方向はN- 80° -E。

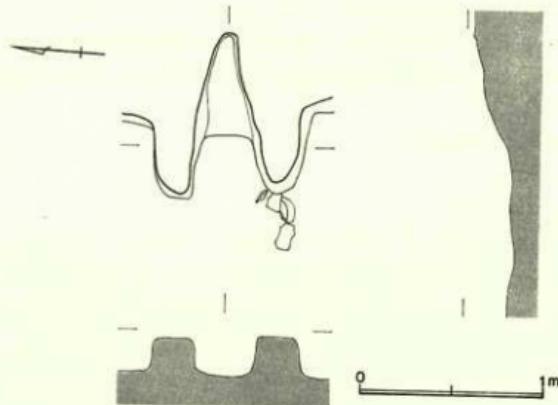
カマドは東壁を掘り込んでつくられており、底は床面よりやや低く、ゆるやかに立上がる。袖は甕の口縁部を芯にして地山のロームを使用してつくられている。カマドの壁は焼けて赤変している。貯蔵穴と思われる $40 \times 45\text{cm}$ の小判形のピットがカマドの南脇にあり、深さ 18cm で底は平坦である。床は平坦で堅い。壁は西側で 25cm で垂直に立上がる。

遺物はカマド脇から壺2・須恵蓋3がまとまって出土しており、他は覆土中の出土である。



- 1 淡暗褐色土 多量のロームブロック・炭化物を含む。
 - 2 暗褐色土 ローム・燒土・炭化物の粒子を含む。
 - 3 暗褐色土 砂を多く含む。
- ※ 全体としてはほぼ均一の土層で混入物の違いによる。

第123図 第57号住居跡実測図



第124図 第57号住跡カマド実測図

第57号住跡出土遺物（第125図）

真間期第Ⅱ期に属する。

土器器

1 坯

MⅢ-7①類 1 (セクション) 口縁部30%、底部25%残。基準資料。橙茶褐色。

MⅢ-8類 2 (57住一括) 30%残。明橙褐色。内外面磨滅。

その他にMⅢ-4類の壺と、MⅢ-7③類の皿、MⅢ-11類の甕の底部がある。

須恵器

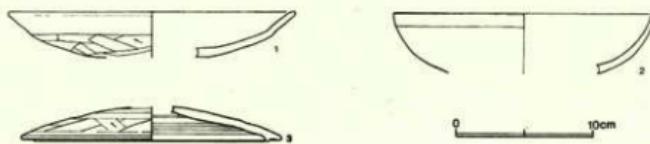
3 (57住一括) 20%残。胎土には酸化鉄、浮石などの細粗粒砂、石英の小石をわずかに含む。焼成良くしまる。チャコレートブラウン、外面頂部付近は黒褐色、かえりは裾部より突出する、ろくろ整形後、外面頂部は回転ヘラケズリ、以下をヘラケズリする。内面も頂部はなでられる。

第58号住跡（第126・127図・図版32・33）

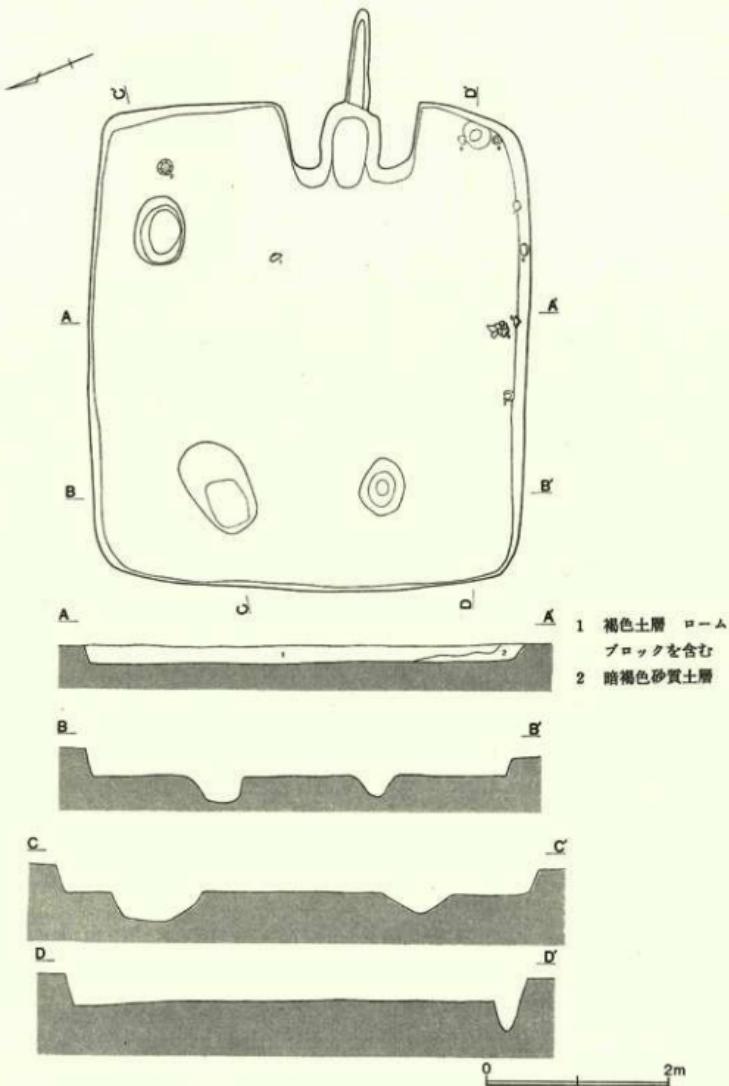
第6地点中央部に位置し、東に隣接して第55号・56号・57号の各住跡がある。

覆土はロームブロックを含む暗褐色土層を主体とし、南壁寄りに砂質土層が堆積していた。

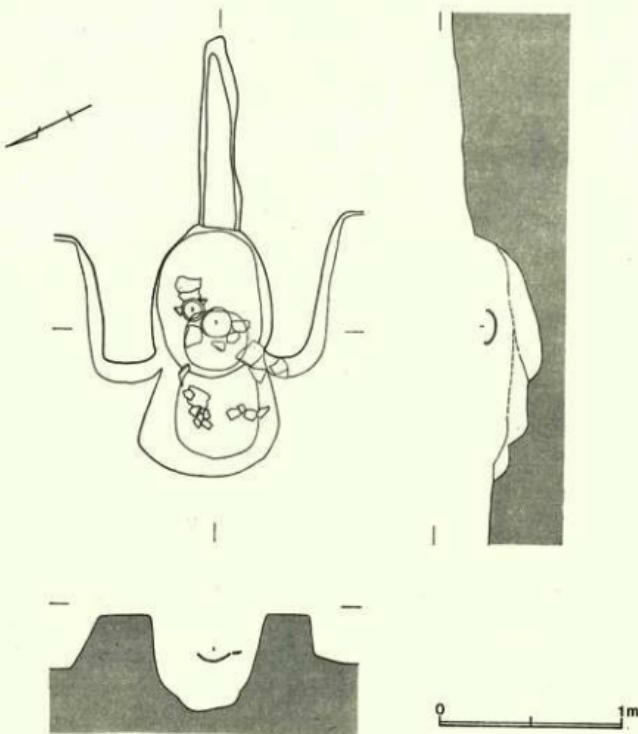
形状は東西方向にやや長い長方形を呈する。



第125図 第57号住跡出土遺物実測図



第126図 第58号住居跡実測図



第127図 第58号住居跡カマド実測図

主軸の方向はN-113°-E。

カマドは東壁に設けられており、底は長椭円形を呈し、最終面で床面から10cm、掘り込み時に25cm程の深さがあった。

柱穴は4か所確認されているが、南東隅は直径30cm深さ32cmの壁柱穴となっており、北側の2個はやや大きい。

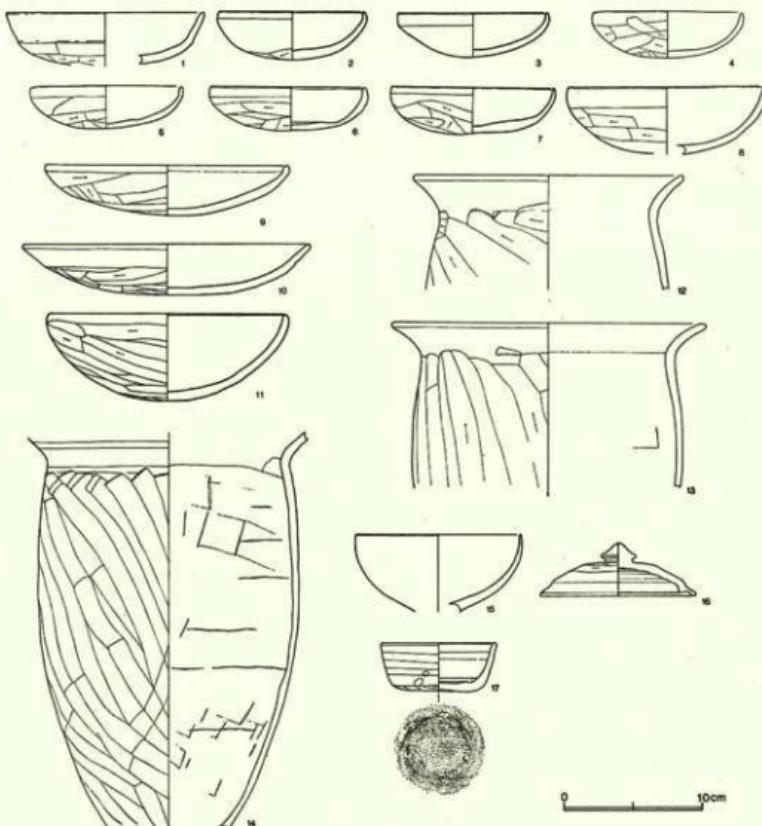
床面は平坦で堅い。壁高は西側で34cmと深く、まっすぐに立上がる。

遺物はカマド中から壺7・塊11が置かれた様に出土し、甕12・13・14が破片で出土している。カマド北側の床面からは塊15・皿9・須恵蓋16が、そして南側の床面から壺8と須恵壺17が出土しており、南側壁下に落ち込むように壺1・5が出土した。

第58号住居跡出土遺物（第128図・図版68）

真間第1期に属する。

土師器



第128図 第58号住居跡出土遺物実測図

1 壺

- M I-1 類 1 (No. 6) 口縁部20%。底部25%残。標準資料。6 (No. 4) ほぼ完形。やや小形。
二次加熱のため器内外面荒れ整形痕不明。淡橙褐色。
- M I-2 類 7 (カマドNo. 2) ほぼ完形。標準資料。
- M I-3 類 8 (No. 9) 30%残。標準資料。
- M I-4 類 3 (No. 3) 70%残。標準資料。器外面は荒れ、整形痕不明。2次加熱か？ 明橙褐色。底部黄～暗褐色。2 (No. 7) 外器面磨滅。橙褐色。底部一部灰黒色。4 (覆土) 外面口縁部直下まで箝削りが施される。口縁部30%を欠く。暗橙褐色。5 (No. 6) 口縁部30%を欠く。内外面とも器面荒れ整形痕不明瞭となる。二次加熱か？ 朱色、底面一部灰黒色。

2 皿

M I—5 類 9 (No. 2) ほぼ完形。基準資料。底部一部灰褐色。

M I—6 類 10 (No. 5) 約65%残。基準資料。

3 塚

M I—7 類 11 (カマド No. 1) 完形。基準資料。橙茶褐色。二次加熱か? 外面は朱色~暗褐色。

M I—12①類 12 (カマド一括) と13 (カマド一括) は同一個体である。60%残。赤茶褐色~暗褐色。

M I—12②類 14 (カマド一括) 脛上半40%, 下半90%残。基準資料。

4 その他の土器

15 (No. 1) 器種不明。胎土は鬼高期によくみられるものである。精製されて砂粒をあまり含まず、僅かに酸化鉄の目立つ焼成の甘い、粉っぽいものである。明橙褐色を呈し、あるいは小形壺かと思われる。口唇部先端は器肉薄く、磨減が激しいので本来の口唇部かどうか不明である。

須恵器

蓋 16 (No. 1) 約42%残。小形で、鈍いかえりをもち、宝珠状のつまみをもつ。胎土に石英の粗粒~小石を含む。焼成良い。暗灰青色、外面に自然釉付着。

坏 17 (No. 8) ほぼ完形、小形、底部は静止糸切り抜法で切り離され、周辺を箒削りによって調整される。ろくろ水挽き成形。胎土には、角閃石、浮石などの微細粒砂を混入、焼成は16よりやや甘い感じ。暗褐色を呈する。

第59号住居跡 (第129・130図・図版33・34)

位置は第6地点南側にあり、北側に第56・57・58・55・53・54号の各住居跡がある。

覆土は砂質の暗褐色土層を主体とし、中央部はロームブロック、炭化物、焼土粒子を含み、床面直上及び壁際には2~3cm程の厚さで川砂が堆積していた為、床・壁等の確認は容易であった。

大きさは5.6m×5.9m。

主軸の方向はN-93°-E。

カマドは西壁やや南寄りに設けられており、底面は床面と同じ高さにある。立上がりは緩やかで煙道がかすかに2.1m程伸びているのが検出された。又、カマド周辺部は床面が10cm程高くなっていた。

貯藏穴はカマド南側に設けられており、梢円形を呈し、ゆるやかに立上がる。

床面はほぼ平坦で堅い。壁高は南側で26cmで斜方向に立上がる。

遺物はカマド内から坏3、床面上から坏4・6、壺10、甕12・13、紡錘車14が出土しており、他は覆土中から出土したものである。

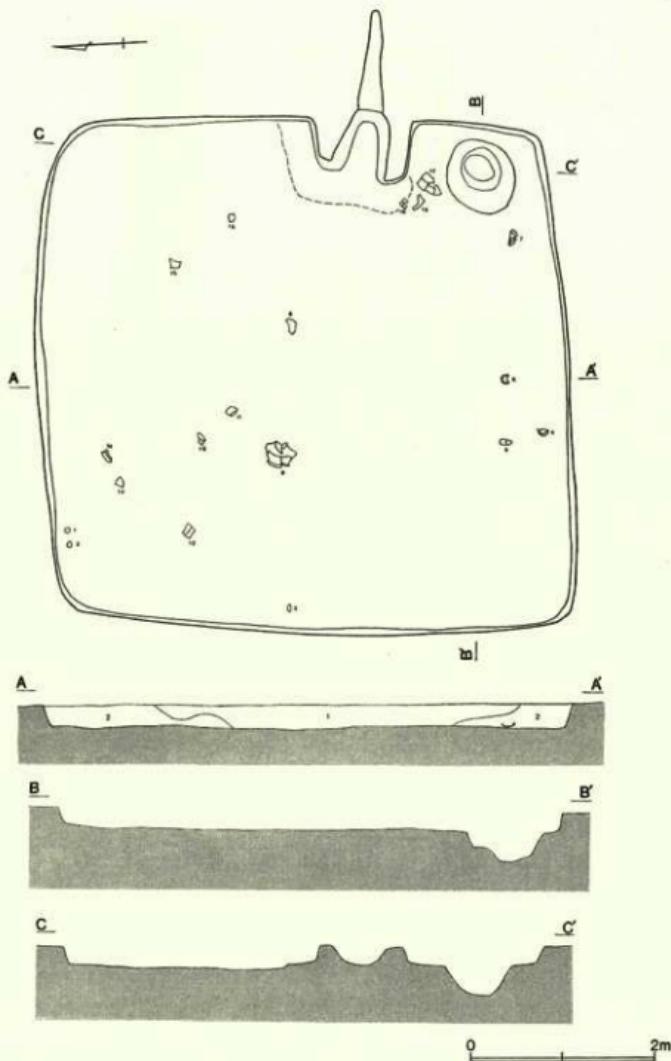
第59号住居跡出土遺物 (第131図・図版69)

鬼高第Ⅳ期に属する。

土器

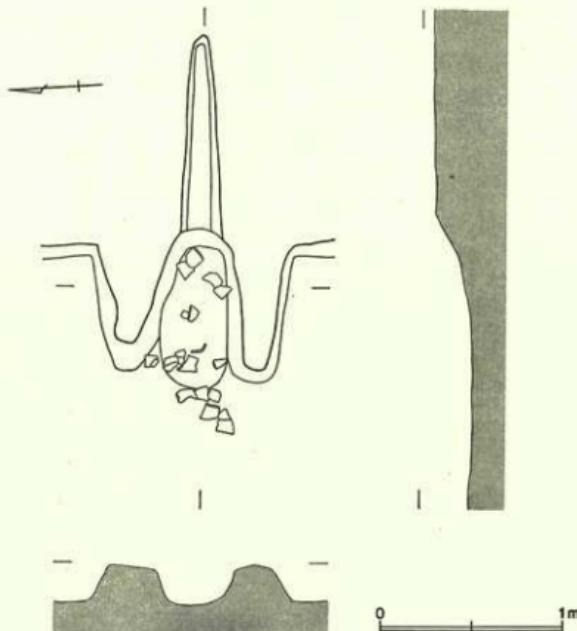
1 坏

O VI—4①類 3 (カマド・覆土) 口縁部48%残。胎土は精製され非常に密で軟質、粉っぽい



- 1 褐色土層 砂・ロームブロック・炭化物・少量の焼土を含みやや粘性が強い。
2 褐色土層 砂を多く含みサラサラしている。床面直上及び壁際には2~3cm厚の川砂があり
覆土と壁の間にはさまっている。

第129図 第59号住居跡実測図



第130図 第59号住居跡カマド実測図

感じ、淡橙褐色。

OⅣ—2類 4 (No.10) 口縁部10%、底部40%残。図ではややかたむきが異なる。口縁部はわずかに開き気味となろう。

OⅣ—3②類 1 (No.19) 48%残。胎土は3に似るが僅かに微粒砂を含む軟質。

2 その他の坏

図示しなかったものの中に、OⅣ—5類で、1と似た胎土の明橙褐色のもの。

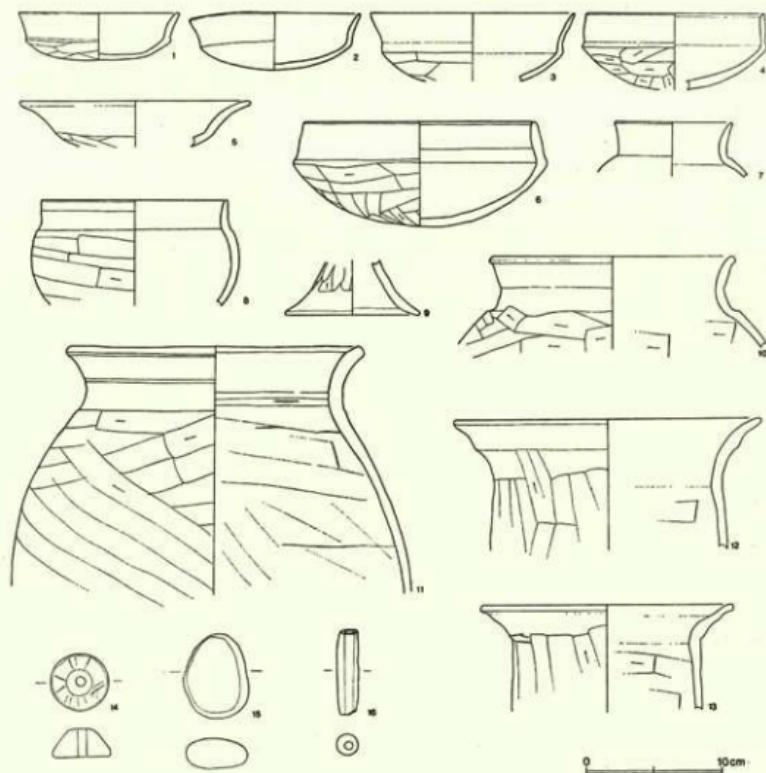
OⅣ—4①類で3より小形のものがある。胎土は3と同じ。第131図2は、手ちがいで51住のものが混入した。

3 鉢

6 (No.4・5) ほぼ完形。古い形態を残したもの。内外面とも器面磨滅。胎土は明黄褐色で、角閃石、赤色粒、浮石などの微細粒砂を多含しザラザラした感じ。焼成はやや甘い、外面に煤付着。

4 高坏

5 (No.11 B区覆土) 40%残。胎土は3と同じ。厚手。2次加熱。黄～橙～暗褐色。9 (B区覆土) 胎土は3と同じ。明橙褐色。その他に9より小形の脚部が覆土より出土している。



第131図 第59号住居跡出土遺物実測図

5 小形壺

O IV:—10類 7 (B区覆土) 90%残。胎土は3と同じ。明橙褐色。

O IV:—11①類 8 (No.15) 23%残。胎土は7と同じ。焼成はやや良い。淡橙褐色。胸部下位暗褐色。

6 大形壺

O IV:—15類 10 (No.8) 25%残。胎土には細粗粒砂を多含し、ザラザラした感じとなる。焼成良く焼きしまる。硬質。橙褐色。11 (No.9) 上半のみほぼ完形。胎土には、微細粒砂の他、粗粒砂、小石を少量含む。焼成は比較的良い。赤彩か？ 暗橙褐色～黒褐色。

7 壺

O IV:—16類 13 (No.18) 30%残。口径は図よりも最低3cmは大きくなるものと思われる。胎土、

焼成は10に似る。赤茶褐色。口縁部は歪む。2次加熱。

8 瓶

O IV:—17 ②類 12 (No. 4 + 17) 38% 残。胎土、焼成は13と同じ。整形は難。2次加熱。明橙～暗褐色。

9 その他の出土遺物

軽石 15 (No. 2) 角閃石を多含する軽石。

鋤鍤車 14 (No. 1) 完形。49g。黒色で全面に光沢をもつ。滑石製。

土錘 16 (No. 3) 完形。太く、両端をたち切ってある。微細粒砂を含み焼成も良い。橙褐色、一部淡褐色を呈する。

第60号住居跡（第132図・図版34・35）

第3地点にあり、南側で第61号住居跡に切られている。

形状は東西にやや長い方形を呈する。

大きさは3.9m × 3.4m。

主軸の方向はN—93°—E。

カマドは東壁の南に寄った部分にあり、底は床面より6cm程低く、ゆるやかに立上がる。

床面はほぼ平坦で堅い。壁高は24cmではほぼ垂直に立上がる。

遺物はカマド南脇部分に集中して流れ込んだように皿14、甕17・21がまとまって出土し、甕2・7・11がカマド中から、甕5・6・8・12、甕19がほぼ床面上に散布しており、他は全て覆土中から出土した。

第60号住居跡出土遺物（第133図・図版69）

真間第Ⅲ期に属する。

土器

1 甕

M III:—1 類 1 (覆土) 8% 残。基準資料。橙赤褐色。

M III:—2 類 4 (No. 3) ほぼ完形。基準資料。橙茶褐色。3 (No. 7) 口縁部50%、底部60% 残。橙褐色。2 (No. 11・カマド中) ほぼ完形。2次加熱。底外面黒斑。黄褐色、内面朱～暗褐色。

M III:—3 ①類 5 (No. 1) 完形。基準資料。橙褐色。

M III:—3 ②類 6 (No. 4) 80% 残。暗橙褐色。底外面に黒斑。内面に煤付着。

M III:—4 類 7 (カマド内) 40% 残。基準資料。2次加熱で内面に粘土が焼け付く。橙褐色。底部外面淡～暗褐色～黒色。

M III:—5 ①類 9 (No. 5) 32% 残。基準資料。橙褐色。

M III:—5 ②類 8 (No. 2) ほぼ完形。基準資料。明橙褐色

M III:—6 類 11 (カマド内) 13% 残。基準資料。橙褐色。内面1mm前後の細い炭化物が付着する。

M III:—7 ②類 13 (覆土) 20% 残。基準資料。橙褐色。14 (No. 15) 約25% 残。器肉やや厚く胎土、焼成はM III:—3 ②類と同じである。暗橙茶褐色。器内外面に黒色が残る。あるいは黒色処理



第132回 第60・61・62・63・64号住跡実測図

1 前褐色土層	4 暗褐色土層(炭化物を含む)	7 褐色土層(炭化物を含む)	10 茶褐色土層	13 茶褐色土層(鉢土を含む)
2 暗褐色土層(焼土・炭化物を含む)	5 暗褐色土層(少量の焼土を含む)	8 褐色土層(焼土・炭化物を含む)	11 茶褐色土層(薄く炭の堆積する層)	14 明褐色土層(ロームを含む)
3 焼土	6 褐色土層	9 黄褐色土層	12 褐色土層(砂粒を含む)	

されたものとも思われる。

MⅢ:—7 ③類 12 (No.13) 75% 残。基準資料。内面まめつ。橙褐色。

2 塊

MⅢ:—8 類 10 (No.8・9) 40% 残。基準資料。橙褐色。

3 小形壺

MⅢ:—9 ①類 15 (No.1) ほぼ完形。基準資料。明橙褐色。

MⅢ:—9 ②類 16 (覆土) 8% 残。基準資料。明橙褐色。内外面磨滅。

4 大形壺

MⅢ:—10 類 21 (No.15—括) 6% 残。基準資料。明橙褐色。18 (No.7) 底部100%、胴部5% 残。外面磨滅。朱色、内面淡黄褐色。

5 壺

MⅢ:—11 類 20 (覆土・カマド北側) 13% 残。基準資料。暗橙褐色。

MⅢ:—12 類 17 (No.15—括) 20% 残。基準資料。橙褐色。19 (No.15—括) 底部のみ残存。内面赤茶褐色。外面暗褐色。2次加熱。

須恵器

1 坯

21 (覆土) 口縁部23%、底部50% 残。ろくろ整形。底部は回転箇削り、外周を内側から外側へ向って削り、段をつくる。胎土には微粒砂の他、細～粗粒砂を少量含む。焼成良。灰白色。

23 (覆土) 口縁部12%、底部25% 残、22と同じ底部のけずりが施され、更に体部側からもヘラをあてて高台風に削り出される。胎土にはやや砂粒多い。焼成良。暗灰青色。

24 (覆土) 口縁部14%、底部40% 残存。ろくろ整形。底部外面回転ヘラケズリ。胎土には微細粒砂の他粗粒砂～小石を多含する。焼成温度は22・23より高く、外面に自然釉が付着する。灰黑色。

25 (覆土) 10% 残。薄手。微細粒砂を含みやや軟質。明灰色。

2 蓋

26 (覆土) つまみ80%、頂部30% 残。扁平な宝珠形つまみ。頂部には丸味をもつ。胎土は25と同じ、焼成はやや良い。内面磨滅。明灰色。

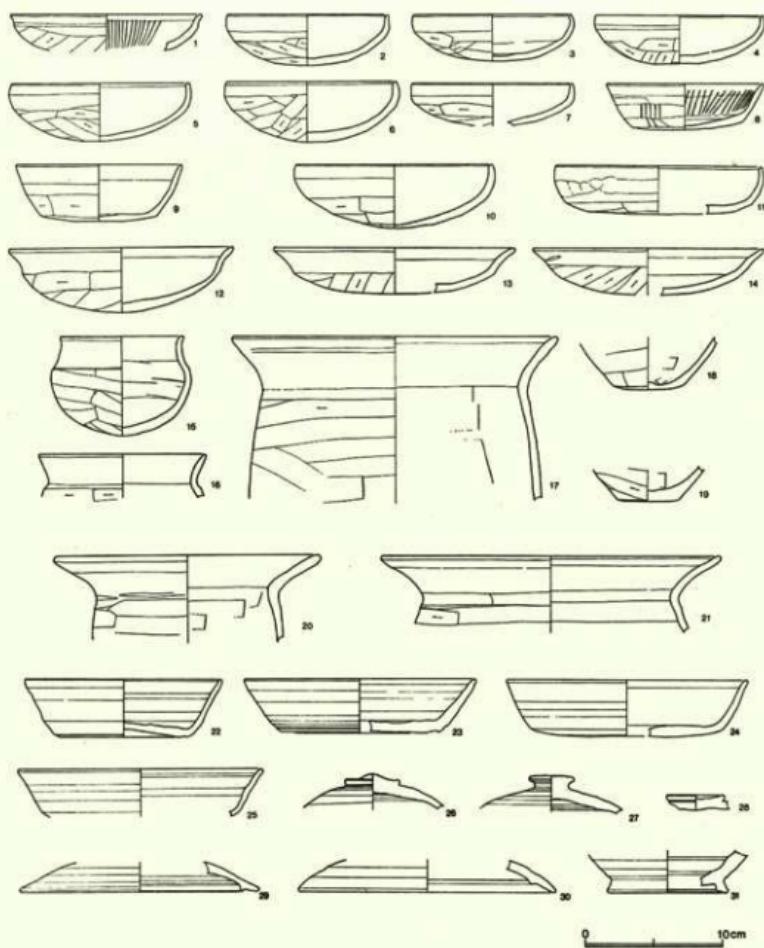
28 (覆土) 宝珠形がくずれた様な形となる。胎土は25に似るが、砂粒の量少ない。焼成良。明灰色。

27 (覆土) 扁平で中央がわずかに凹む丈の高いつまみ、13% 残。頂部は直線的な開きをみせる。厚手、微細粒砂多含し、粗粒砂を少量含む。暗灰色。

29 (覆土) 11% 残。かえりは裾部よりもやや突出する。微細粒砂を含む。焼成温度は高く、外面に自然釉付着。淡灰青色。

30 (覆土) 10% 残。かえりは丸くなり、奥まる。胎土は27に似る。やや軟質。明灰色。

31 (覆土) 25% 残。微粒砂の他に細～粗粒砂をわずかに含む。焼成良く灰釉陶器とも思われる。明灰色。2次加熱により、外面灰白色～暗灰色。



第133图 第60号住居跡出土遺物実測図

第61号住居跡（第132図・図版34・36）

第3地点に位置し、第60・62・63・64号の各住居跡を切っている。

覆土は茶褐色土層で、下層で薄い炭化物の層が見られた。

形状は方形を呈する。大きさは $6.4m \times 6.6m$ と大きい。

主軸の方向はN-22°-W。

カマドは北壁のやや西寄りにあり、底は舟底状に浅く掘り窪められ、ゆるやかに立上り、煙道は更に1.1m程延びる。

床はほぼ平坦で堅い。壁高は北側で36cmでほぼ垂直に立上がる。

遺物は南壁際の床面上から壺1・2が、そして壺3はやや浮いた状態で出土し、壺7は中央部床面上から出土し、破片で接合したものであり、他は覆土中から出土したものである。

第61号住居跡出土遺物（第134図・図版70）

真間第Ⅰ期に属する。

土器器

1 壺

M I-1類 5 (覆土) 小形で口縁部も短くなる。赤彩。胎土、焼成は基準資料とほぼ同じ。やや砂粒細かい。7 (No.4・5) 約40%残。胎土、焼成、整形5に似る。橙褐色。底外面に黒斑。

M I-3類 2 (No.9) 48%残。胎土、焼成、色調とも2類と同じ。

M I-4類 3 (No.10) ほぼ完形。内外面磨滅し整形痕不明瞭。明橙褐色。2次加熱か? 6 (No.9) 約45%残。淡橙色。口縁部は強く内湾する。

M I-7類 1 (No.8) 75%残。器面は内外面とも細く剥離し、整形痕不明瞭。橙褐色。

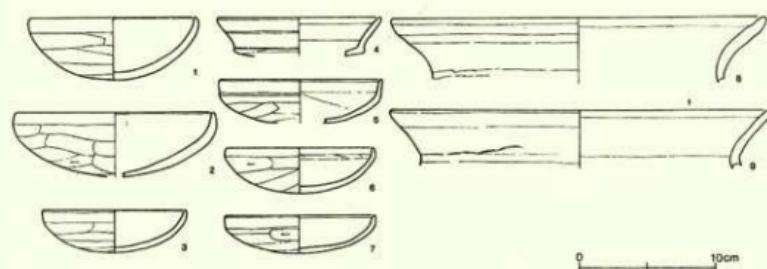
2 その他の壺

4 (覆土) は62件か64件からの混入と思われる。13%残。淡橙褐色。外面黑色。

3 壵

M I-11類 8 (覆土) 6%残。淡橙褐色。焼成甘い。

M I-12①類 9 (表採) 8%。残2次加熱のため器内外面荒れる。焼成甘い。橙～暗橙褐色。



第134図 第61号住居跡出土遺物実測図

第62号住居跡（第132図・図版34・36）

第3地点に位置し、63号住居跡を切っており、61号住居跡に切られている。

覆土は褐色土層を主とし、下層になるに従い、炭化物、焼土がより多く混入していた。

形状は西側が切合っている為、不明であるが、方形を呈するものと思われる。

大きさは $4.6m \times 4.0m$ 。主軸の方向はN-70°-E。

カマドは東壁中央部につくられ、底は床面と同じ高さにあり、ゆるやかに立上がり、1.18mの煙道へ続く。

貯藏穴はカマド南側に方形のピットがあり、これと考えた。ピットは他に、南壁下にあたる部分に円形のピットがある。

床面は平坦で堅い。壁高は東側で28cmでほぼ垂直に立上がる。

遺物はピット中から壺1が出土しており、他は覆土中から出土したものである。

第62号住居跡出土遺物（第135図・図版70）

鬼高第Ⅴ期に属する。

土器

1 壺

O V-1 ①類 2 (不明) 口縁部5%、底部25%残存。基準資料。橙褐色。底部外面に黒斑。

2 鉢

O V-6 類 3 (No. 1) 60%残。基準資料。

3 小形壺

O V-9 類 4 (覆土・50号住居No. 4) 45%残。

2次加熱のため外面器面荒れボロボロになる。朱色～暗茶褐色。内面、淡褐色～暗褐色。胎土は1号住居12に似る。

第63号住居跡（第132図・図版34・37）

第3地点にあり、北を第61、東を62号住居跡に切られている。

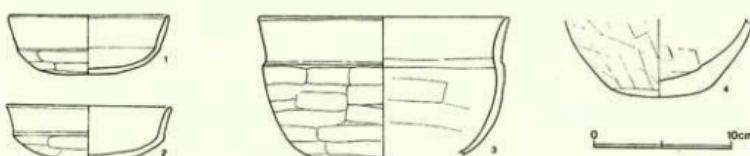
覆土は暗褐色土層を主とし、下層には焼土が混入していた。

形状はやや隅の丸い長方形を呈するものと思われる。

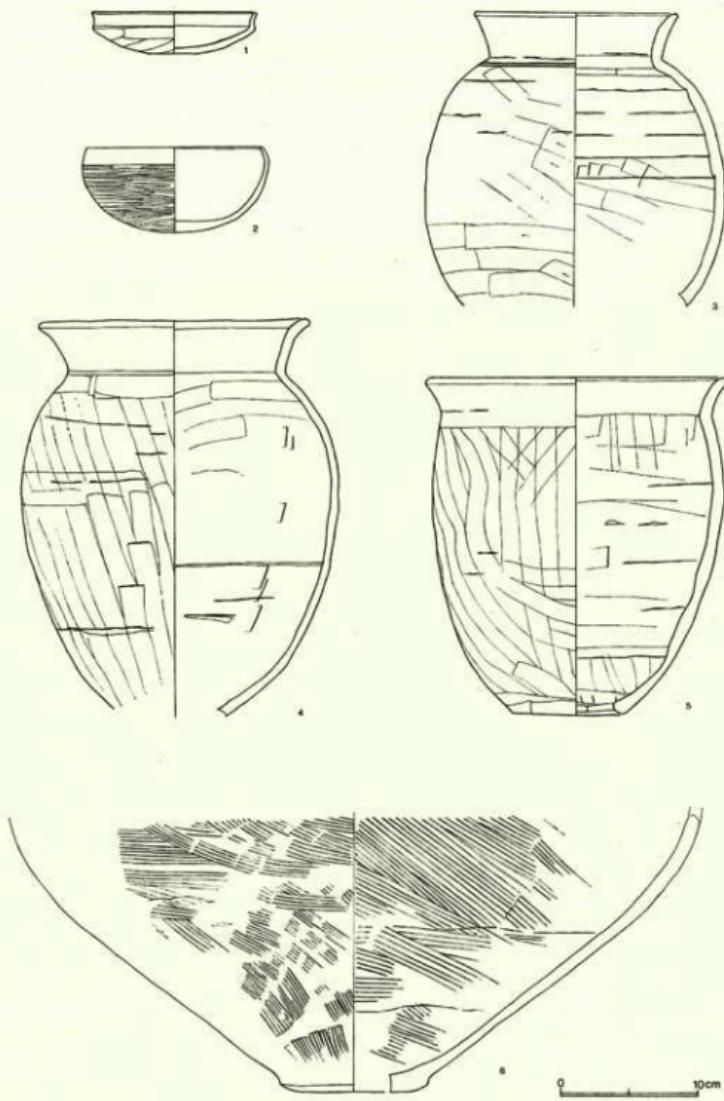
大きさは(5.0)m × (4.6)m。

主軸の方向はN-137°-W (長軸)。

カマドは検出できなかった。



第135図 第62号住居跡出土遺物実測図



第126図 第63号住居跡出土遺物実測図

ピットは住居跡内に2個、外に3個があり、住居内の1個は柱穴と考えられるが、壁外のものは不明である。

床面は平坦で堅い。壁高は南西側で15cmである。遺物は床面上から瓶5・甕6が出土しており、甕3・4は5~6cm程浮いた状態で出土し、他は覆土中からである。

第63号住居跡出土遺物（第136図・図版70）

鬼高第1期に属する。

土師器

1 壺

O I-7類 2 (No.6) ほぼ完形。基準資料。

2 大形甕

6 (No.1) 20%残、非常に大型、底径10.8cm、内外面に刷毛目痕が残る。

3 甕

O I-19①類 4 (No.7) 口縁部10%、胴部80%残。胎土は3に似るが、石英などの粗粒砂~小石を含み焼成も良く焼きしまる。黄~橙褐色。外面に10×12cmの黒斑。

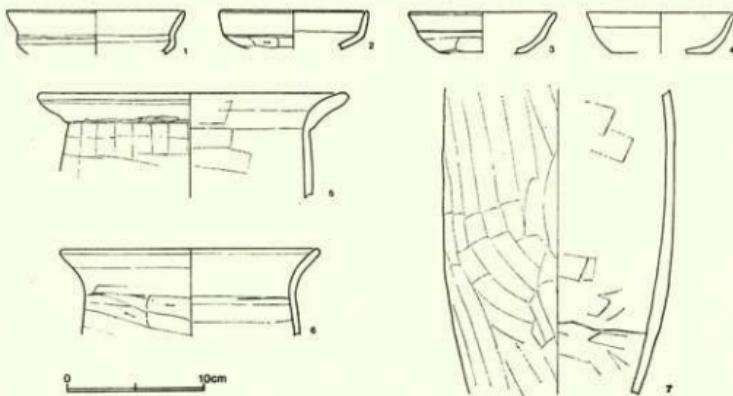
O I-19②類 3 (No.5) 口縁部23%、胴部35%残。基準資料。口縁部外面に煤付着。内面胴部上半まき上げ痕が顕著に残る。

4 瓶

O I-21類 5 (No.3) ほぼ完形、胎土は4に似るが、細粒砂が多い。焼成は甘くやや軟質。淡黄褐色。外面赤彩。胴外面に12×14cmの黒斑。

5 その他

壺1は62号住のものと思われる。



第137図 第64号住居跡出土遺物実測図

第64号住居跡（第132図・図版34・37）

第3地点に位置し、東側を第61号住居跡に切られ、南西側を耕作等によって削られていた。

形状は北東壁のやや短かい方形を呈する。

大きさは3.5m × 3.1m。

主軸の方向はN—47°—E。

カマドは検出できなかった。

ピットは南西壁寄りに2ヶ所確認されているが、中央部は柱穴状、隅のものは貯蔵穴かと思われる。床面は平坦で堅い。壁高は12cmと浅い。

遺物は南西壁寄りの床面から土師器壺1・甕5・6・7が出土し、他は覆土からの出土である。

第64号住居跡出土遺物（第137図・図版70）

鬼高第V期に属する。

土師器

1 壺

O V—1②類 1 (No. 2) 20%残存。橙褐色。外面磨滅が著しい。基準資料。

O V—2類 2 (覆土) 20%残存。明茶褐色。口径はあと1cm位大きくなるものと思われる。接合しない破片をまわすと約50%残。図示しなかったものに、口縁部の短かいものがもう2個体ある。

2 甕

O V—12②類 5 (No. 3) と 7 (No. 1) は同一個体と思われる。胎土焼成は1号住17と同じ、口縁部は縦に細く割れる。内面と口縁部橙茶褐色、一部淡橙褐色。外面は、茶褐色～暗褐色、一部淡橙褐色。

O V—12③類 6 (No. 3) 接合しない口縁部12%と頸部55%の図上復元。胎土は1号住15に似る。

2次加熱のため器面荒れザラつく、淡橙褐色。

掘立柱建物跡（第104図・図版26）

第5地点北側にあり、63号住居跡と切合っている。

長軸方向はN—26°—E。

棟行2間×桁行1間(2.2m × 2.1m) 芯心間は棟行で1.1mと1.0mを測る。

No	形態	大きさ(cm)	深さ(cm)	備考	No	形態	大きさ(cm)	深さ(cm)	備考
P ₁	円形	45 × 44	30		P ₄	橢円形	(29 × 32)	31	
P ₂	不整形	44 × 42	30		P ₅	円形	34 × 34	28	
P ₃	方形	40 × 39	21		P ₆	方形	43 × 39	36	重複

出土遺物は、土錐が1個ある。手違いで第141図17に載る。

2 土壌と出土遺物

第1号土壌（第138図・図版38）

第2地点南側にあり、西側に第2号土壌が隣接している。

形状は南北にやや長い長方形を呈する。

大きさは $2.82\text{m} \times 2.55\text{m}$ 。

長軸の方向はN— 14° —W。

床面は平坦である。壁高は北側で18cmでほぼ垂直に立上がる。出土遺物はかなり磨滅した高坏脚部1・2が覆土中から出土した。

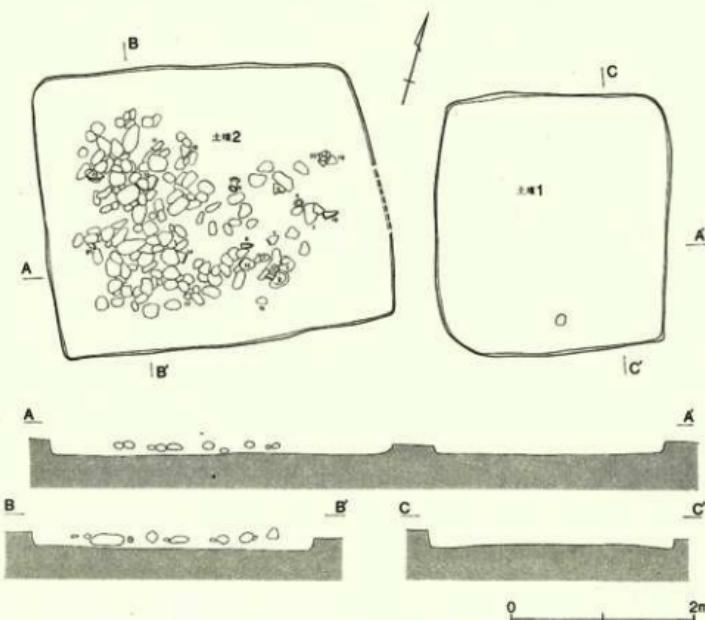
第2号土壌（第138図・図版38）

第2地点南側にあり、東側に第1号土壌が隣接している。

形状は南側に比して北壁のやや短かい、東西に長い長方形を呈し、大きさは $3.74\text{m} \times 3.05\text{m}$ 。

長軸の方向はN— 69° —E。

底面は平坦で、壁高は西側で17cmを測り、ほぼ垂直に立上がる。



第138図 第1・2号土壌実測図

造構の覆土中からは直径15cm内外の自然石が多く出土し、これに混入するよう坏了3・4、こね鉢5、高盤8が出土している。

第3号土壙（第139図・図版38）

第2地点中央部北側にあり、西に第9～12号、東に第16号住居跡がある。

形状は南北方向に長く、西壁のみやや長い長方形を呈し、大きさは $2.93m \times 2.43m$ 。

長軸の方向はN-5°-E。

床面はほぼ平坦で壁高は北側で27cmではほぼ垂直に立上がる。

遺物は南壁寄りの覆土中から高盤脚部が出土している。

第4号土壙（第27図・図版8）

第2地点中央部北側にあり、第5号土壙に切られている。

形状は隅のやや丸く南北に長い長方形を呈する。

大きさは $2.45m \times 2.06m$ 。

床は平坦で、壁高は15cmではほぼ垂直に立上がる。出土遺物なし。

第5号土壙（第27図・図版8）

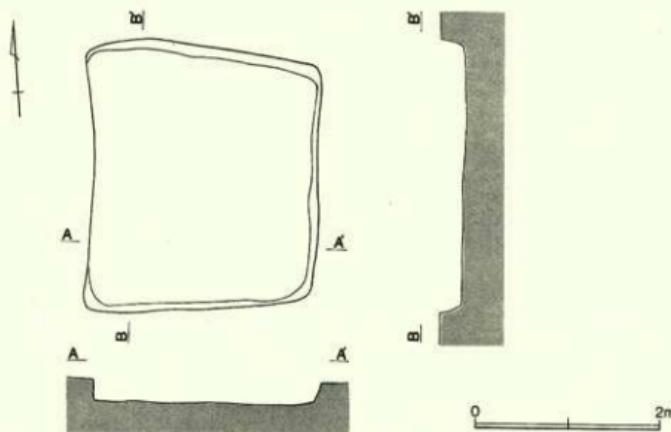
第2地点中央部にあり、第15号住居跡、4号土壙を切っている。

覆土は暗灰褐色土中に燒土を含む。

形状は南北方向に長い長方形を呈し、大きさは $1.98m \times 1.08m$ 。

主軸の方向はN。

底は平坦で壁はラスコ状に立上がる。出土遺物なし。



第139図 第3号土壙実測図

第6号土壙（第32図・図版39）

第2地点中央部東寄りに位置し、南に第17号住居跡が隣接している。

形状は東西方向に長い長方形を呈し、 $2.51m \times 1.36m$ を測る。

底は平坦で壁高は5cmと浅い。

遺物はピット中から壺12~14、高台付壺15・16が出土している。

第7号土壙（第29図・図版8）

第2地点東側にあり、16号住居跡に切られている。覆土は淡褐色土を主体とする。

形状は南北方向に長い長方形を呈する。大きさは $2.58m \times 1.70m$ 。

長軸の方向はN-17°-E。

底面は平坦で壁高は23cmではほぼ垂直に立上がる。

遺物は床面上から壺18が出土している。

第8号土壙（第75図）

第4地点北側にあり、南側に37号住居跡がある。形状は南側は不明であるが、方形を呈するものと思われ。東西方向は $3.87m$ を測る。

底は平坦ではほぼ垂直に立上がる。出土遺物なし。

第9号土壙（第75図）

第4地点北側にあり、南側に37号住居跡・東側に8号土壙が隣接している。形状は西側は不明であるが、方形を呈するものと思われ。大きさは $2.68m \times (1.0)m$ 。

底は平坦で壁高は5cmと浅い。出土遺物なし。

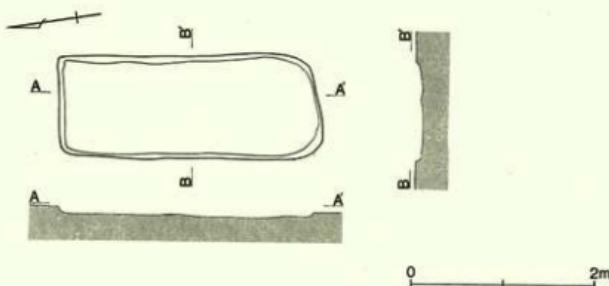
第10号土壙（第140図・図版39）

第4地点中央部にあり、東側に39号住居跡が隣接している。

形状は南北方向に長い長方形を呈し、大きさは $2.87m \times 1.10m$ 。

長軸の方向はN-10°-E。

底は平坦で、壁高は7cmと浅い。出土遺物なし。



第140図 第10号土壙実測図



第141図 第1・2・3・6・7号土壤出土遺物実測図

土壤出土遺物（第141図・図版71）

第1号土壤

1（覆土）脚部のみ 100% 残。裾は磨滅し、あるいは内面に回る粘土が更に下方へ続くのかどうか不明である。角閃石、雲母などの微粒砂を含む。焼成良。茶褐色、外面一部黒色。整形はやや難で、成形時の凹凸のこる。

2（覆土）脚部のみ、据部を欠く。内面にはしづり目痕。外面は笠削り後、笠磨き。上部は柄部分である。微細粒砂（角閃石・石英・雲母）。焼成良。橙褐色。以上は、和泉期のものか？

第2号土壤

土師杯

MⅡ-2類 3（覆土・第1土壤覆土1片）80% 残。微～細粒砂含み、焼成比較的良。橙褐色、外面半分黒色。器面磨滅、黒色部は整形痕良く残る。

MⅡ-6類 4（No.15・19・第1土壤覆土）42% 残。焼成やや甘い。橙褐色。磨滅著しい。

須恵器

こね鉢5 (No.1) 底部80%を欠く。口径15.5cm、底径11.2cm、器高9.2cm。胎土には微細粒砂の他、石英の小石含み焼成良い。焼むらがある。明灰紫色、口縁部内外面淡灰色。内面には巻き上げ痕。ろくろ整形。外面範削り。

甕6 (No.6) 約10%残。胎土は非常に密、焼成も非常に良い。灰色。内面に鉄釉、われ口紫褐色。

台付盤7 (No.12) 口縁部25%、台接合部100%、台裾部20%残。推定口径25.0cm、台径11.9cm。端部は僅かに欠ける。脚部は裾部よりも内側で接地する。胎土には角閃石、浮石などの微～細粒砂を含む。焼成良。内外面に巻き上げ痕。ろくろ整形。底部外面、回転ヘラケズリ(反時計回り)。脚内面も比較的丁寧になでられる。

第3号土壤

鬼高窯前半のものと思われる。OⅠ期か?

土師高杯

9 (3号土壤) 脚裾部を欠く。胎土には酸化鉄粒が目立つ。焼成良。赤褐色。

紡錘車

10 (3号土壤) 50%残。35g。黒色滑石製。磨って面取りする。使用のため光沢をもつ。

第4号土壤

須恵蓋

11 (覆土) 15%残。微～細粒砂。やや軟質。灰色。ろくろ整形。

第6号土壤

国分Ⅱ期か、それよりやや新しいものと思われる。

KⅡ-2類 13 (貯蔵穴内) 口縁部30%、底部40%残。微細粒砂少量含み、焼成良。橙褐色。

12 (貯蔵穴内) 底部にはヘラ削り痕認められずしぶり込んだようなしわが目立つ。胎土、焼成13と同じ、橙褐色、内外面一部褐色。

KⅡ-4類14 (貯蔵穴内) 25%残。胎土、焼成13と同じ。橙褐色。内面橙茶褐色。口縁部は括れて更に内湾して開く。

須恵高台付杯

15 (貯蔵穴内) 21%残、貼付高台、胎土には微粒砂の他、片岩などの小石を含む、焼成甘く軟質。灰～灰黑色、底内面灰色。

16 (貯蔵穴内) 30%残。大形。微・粗粒砂(角閃石、酸化鉄)。焼成良。外面黒褐色、内面茶褐色。

第7号土壤

国分第Ⅱ期に属する。

KⅡ-3類 18 (床直) 口縁20%、体部25%残。橙褐色。

17は土壤よりの出土遺物ではなく、掘立柱の柱穴内からの出土である。約15残存。胎土には酸化鉄粒を特徴的に含む。25号住出土のものと胎土は同じ。やや大形。

3 河川跡と出土遺物

本遺跡のある微高地と、南側にある南側にある微高地の間には浅い谷が入っており、現状は一段低くなった陸田となっていた。南側にある微高地には五明庵寺があり遺跡南端から140m程の距離にある、やや離れてはいるものの、庵寺に関連する堀、溝等の存在を考えて遺跡内南側の谷部分に路線方向と直交するような形で、150m程の部分に約20m程の間隔をあけて幅1.5mのトレンチを設定し、試掘調査を行なった。名称は東から西へ向かって、T1～T9とした。（第142図）

トレンチ内の層序は表土・灰褐色土・灰褐色土・茶褐色土・暗茶褐色土で低くなっている部分には暗茶褐色砂質土・淡灰色粘土・暗灰色粘土・明灰茶褐色粘土が順に堆積しており、地山は疊層になっている。（第143図）

立上がり部分はT2中央部では急角度であるが、T3～T9ではなだらかになっており、土層断面から見ても、掘り込み等の明確な痕跡は発見できなかった。河川の跡と考えた。

遺物は6T中央部の疊層直上から土器高台付盤12・13が伏せられた状態で出土し、（★印）4Tの底から須恵器長頸瓶5が、他は覆土中から出土したものである。

河川跡出土遺物（第144図・図版71）

第2トレンチ

1は、溝のトレンチからの出土ではない。約20%残。内外面に、タタキ目痕やあて具痕をなで消した様子がうかがえる。頭部外面には笠の痕がつく。微、細粒砂含。焼成良。灰黒色。

2も1と同じく、古墳と思われていた砂山に入れた第2トレンチ出土のものである。内外面におさえ具痕、タタキ痕残る。微粒砂含み、密。焼成良。

2、3が、溝に入れた2トレンチ出土のものである。

3 石錐 35g。石質砂岩。両端を2度づつ打ち欠いている。

4 浮き 16g。1～4mm大の角閃石などを含む浮石。右下端を欠く。

第4トレンチ

土錐

5（拡張部）微細粒砂含み、焼成非常に良い。一方の端部をわずかに欠く。端部切りおとし。淡橙灰色。細長い形態となる。8g。

6（拡張部）微細粒砂。焼成非常に良い。一端を欠く。切りおとし。灰褐色、一部褐色。形態、形状ともに5と同じ。9g。

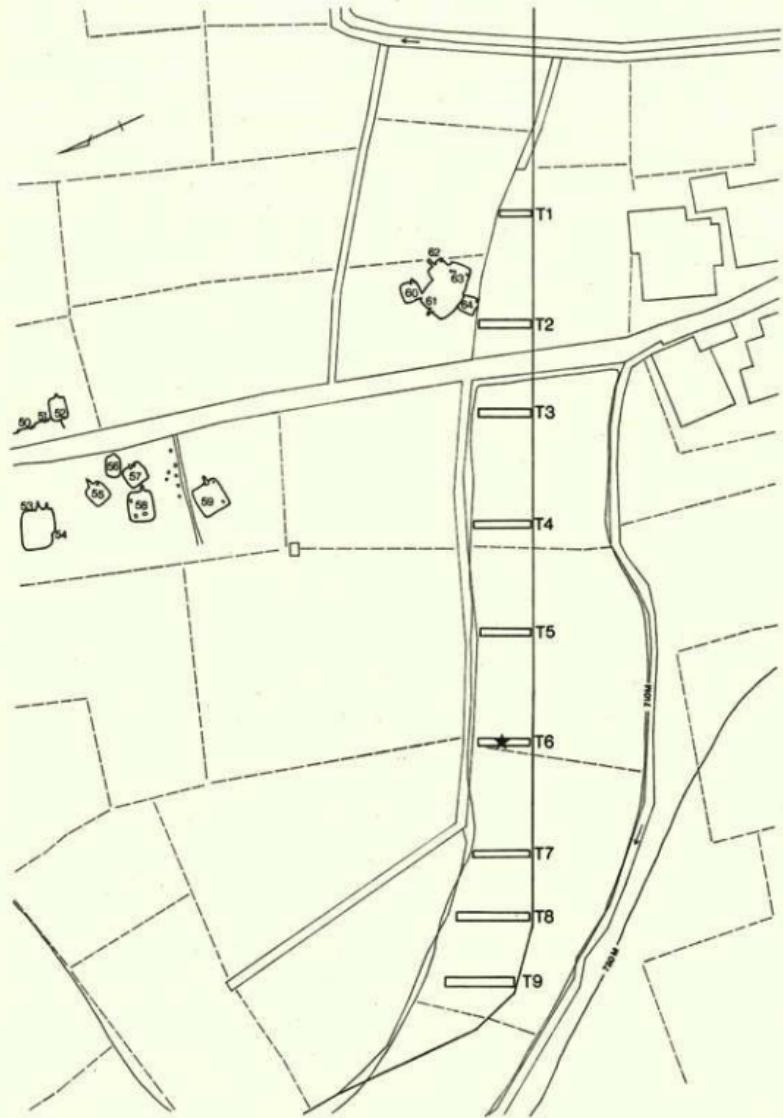
7（床面）前2者とはやや異なるタイプ。端部に丸味をもち、やや太く、焼成はふつう、微細粒砂。橙褐色。1/3を欠く。5g。

8（底面）長頸瓶の肩部から頸部。微、細粒砂含み。焼成良。灰色。頸部外面に鉄釉付着。

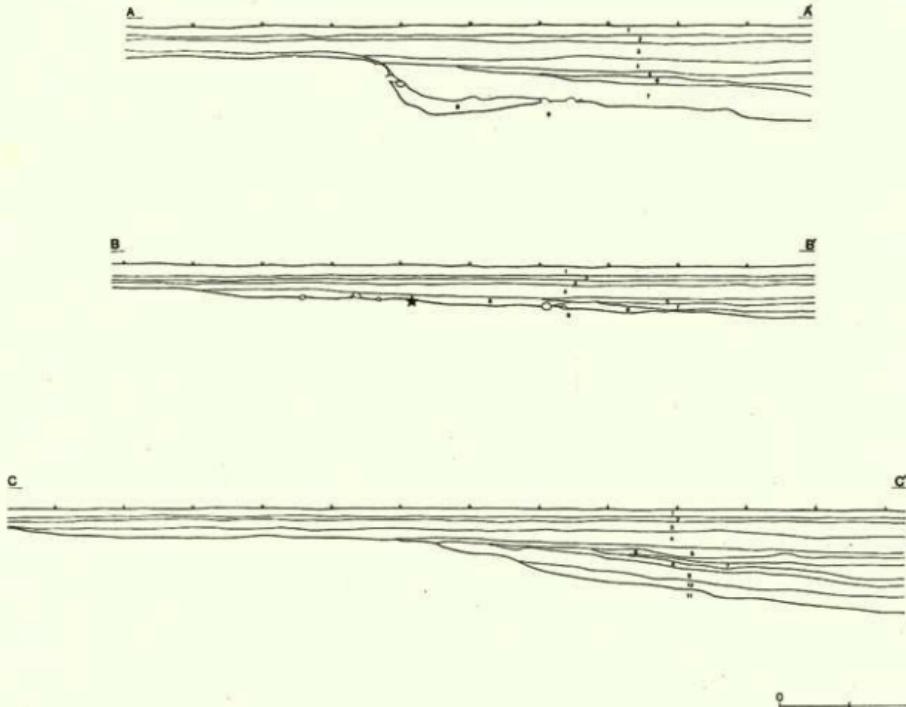
9（底面）瓶の頸部。微細粒砂、僅かに小石含む、胎土粗い。灰黒色。

第5トレンチ

14 須恵蓋。微～粗粒砂。焼成良。暗茶褐色。かえり部を欠く。かえり部は裾部よりも突出する形態となろう。22%残。



第142図 河川跡試掘溝位置図



第143図 河川跡 試掘溝土層断面図

T 2 土層A-A'

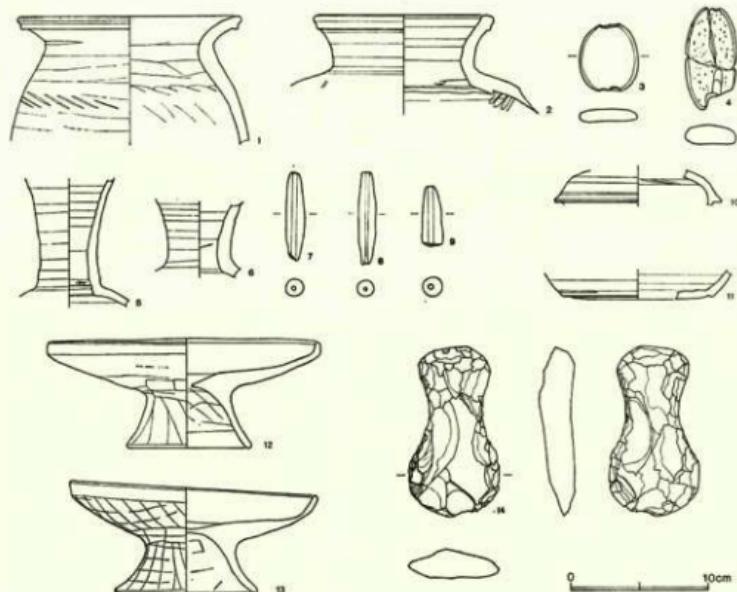
- 1 暗灰褐色粘性表土
- 2 灰褐色土 鉄分及び白色砂粒を含む
- 3 茶褐色土 微量の焼土を含む
- 4 暗茶褐色土 少量の焼土含む
- 5 暗褐色土 少量の焼土を含み灰色味を帯び粘性がある
- 6 暗茶褐色土 少量の焼土を含み黒味を帯びる
- 7 暗褐色土 焼土を含み灰色味を帯びる
- 8 茶褐色土 粘性を帯びる
- 9 褐色土 層厚径10cm内外

T 6 土層B-B'

- 1 暗灰褐色粘性表土 砂粒を多く含む
- 2 灰褐色土 紅褐色砂粒を含む
- 3 茶褐色土 砂粒を少量含む
- 4 暗茶褐色土 少量の焼土 土器片を混入する
- 5 褐色土 灰色を呈し粘質
- 6 暗褐色土 砂粒を含む
- 7 黑褐色土 砂質 黑褐色砂粒を含む
- 8 黑褐色土 砂粒を含む
- 9 褐色土 層厚

T 9 土層C-C'

- 1 暗灰褐色粘性表土
- 2 灰褐色土 白色砂粒 褐色砂粒を含む
- 3 茶褐色土 砂粒を少量含む
- 4 暗茶褐色土 少量の焼土 土器片を含む
- 5 暗茶褐色砂質土
- 6 淡灰褐色粘土
- 7 暗灰褐色粘土
- 8 明灰茶褐色粘土
- 9 黑褐色砂質土
- 10 暗褐色粘質土
- 11 褐色土 層厚



第144図 河川跡出土遺物実測図

第6 トレンチ

須恵杯

11 (第6 トレンチ) 30% 残。42号住出土の須恵杯の底部の特徴をもつものである。淡灰色。胎土は微細粒砂含み密。焼成非常に良く、硬質。

土器器台付盤

12 (No. 2) 口径19.6cm、接合部径6.2cm、裾部径9.0cm、器高7.8~7.1cm。底部中央部は器内薄く、穴が開く。口縁部25%、底部80%、台部70% 残。形態、胎土、焼成とも13と同じ。外面の荒れはやや激しい。明橙褐色。

13 (No. 1) 坯部は一方が高く一方が低くなる。脚部は「へ」の字状に開く。口径17.9cm、接合部径6.5cm、裾部径10.3cm、器高8.7~7.2cmとなる。胎土には角閃石、浮石、石英などの微粒砂と、細~粗粒砂含む。焼成良。明茶褐色。口縁部8%、底部100%、台裾部40% 残。坯外面磨滅、内面に有機物付着。

第7 トレンチ

14 石斧 分銅形。石質、頁岩。

4 その他の遺物

縄文土器

発掘着手前に採集したものや遺構の確認作業中検出されたものである。遺物の分布状態は概して散漫であったが、ほぼ完全に復しえるものがあることから何らかの遺構が存在した可能性もある。しかし、神流川の氾濫原であり、粘土層を基本とした土が堆積しているため、遺構検出のため、精査したが、検出することはできなかった。発見された遺物は縄文時代中、後期の土器で、その主体は後期の堀之内Ⅰ式土器である。

第1群土器（第145図1～11）

中期の土器を一括する。1はキャリバー形土器の胴部破片で、地文縄文L Rの上に二条の隆帯による懸垂文が配される。2は内縁部破片に弧状の沈線がみられる。地文はR Lの縄文であるが連弧文系の土器であろう。1は加曾利EⅠ式終末からEⅡ式前半の土器、2はEⅡ式中葉以後のものであろう。

2はキャリバー形土器の口縁部破片。口縁部の渦巻文は隆帯もあるが、太い沈線が主となるものであり、加曾利EⅢ式段階の可能性がある。4、6は磨消しの懸垂文で、幅がせまく、5などの磨消懸垂文の土器と顔つきが異なる。EⅢ式段階であろう。5・7・9は2本沈線間を磨消した懸垂文で懸垂文間は充填縄文であろう。5は幅広の懸垂文が予想される。8は両側になでのある微隆帯にかこまれた懸垂文。EⅣ式以後に属そう。

10は阿側に幅広のなで痕を伴う隆帯で、大渦な渦巻文を口縁部に配するものと思われる。

11は無文部が広く、後期的特徴もみられるが、太い沈線による逆「U」字文がみられることから加曾利EⅢ式後半以後にみられる上下に文様を帯する土器になるかもしれない。

第2群土器（第145図12～41・第146図1・3・4）

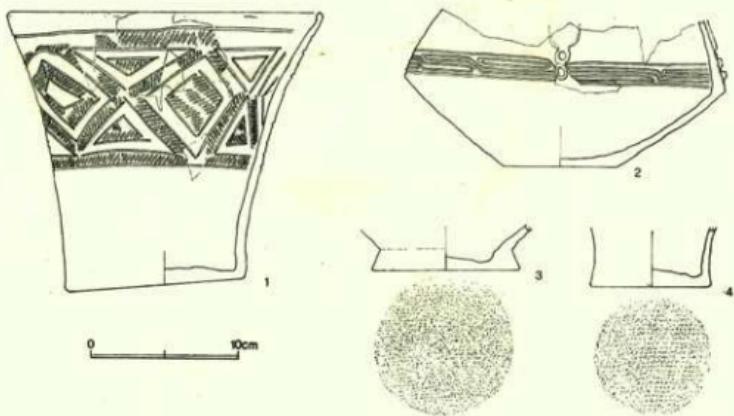
堀之内式土器であり、その主体は堀之内Ⅰ式である。復元できた土器は菱形の幾何学文を主としたモチーフによる磨消縄文の土器がある。12・13・17は胴中位で括れ、無文の上半が外反する土器であろう。括れ部では二条あるいは三条の沈線がめぐり、要所要所に「8」字貼付文、重圓一条の沈線が引かれ、「Y」字状文風のモチーフが描かれよう。19・28は二本を単位とした直線的な文様が描かれる。

第146図1、第145図20・27は三角形あるいは菱形のモチーフが重層して器面を描くもの。25等の二本の沈線間を磨消のというよりは、重層した沈線間を一つおきに縄文を充填したものであり、堀之内Ⅰ式終末からの要素を強く残すものである。器形は口縁部で大きく開き、上端は内曲し、22の「Y」字沈線の土器と共通した口縁である。26は交半円文や連弧状の文様が描かれるもの。18は太い3条の沈線がカーブしているもの。他に比してやや古くなるかも知れない。13は長方形状の把手が突出したもの。把手下に隆帯の渦巻あるいは円形文があり、両側の隆帯に沿う沈線内に縄文が充填される。

19～41は明らかな堀之内Ⅰ式土器である。19・22・28は擦痕のある器面に沈線文で文様を描くも



第145図 繩文土器拓影図



第146図 繩文土器実測図

の。22は現存部から波状線と思われるが、はっきりしない。口縁は内曲する。文様は口縁に沿って互に縄文帯がこないが、重層した文様と思われ、第146図1等の変異の一つであろう。

25、31等は三角形を基本とした直線的な幾何学文のモチーフで幅の狭い二本の沈線間に縄文が充填されており、無文部が広がる。

29、30は渦巻、円形等の曲線的モチーフが描かれるもの。30のように二本の沈線が著しく幅狭になるところがあるなど、崩れもみられ、概して新しい一群といわれる。

32・38はこの種の深鉢の胸下半の破片で、横走縄文帯下は無文となる。

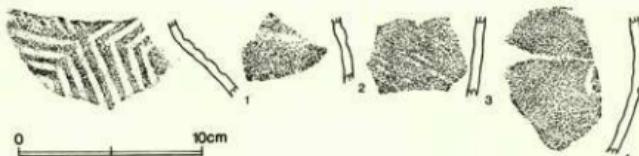
21・33～37・39は注口あるいは壺形土器の破片であろう。34は三本の横走する沈線がみられるが、器形的に内傾が著しく、壺的なものにならうか。33は大形の環状把手部であり、内傾することから注口の把手であろう。把手外面は縦長の台形であり、外周に沿って沈線が引かれる。把手両側の口縁上半の文様は重層した梢円形の沈線が配される。36は注口下の破片、35は肩部である。いずれも二本の沈線間の磨消縄文帯は幅が狭い。特に、35は渦巻文があり「門」状文が重ねられており、新しい要素が窺える。大形の注口とならう。

21・37・39は脣部の屈曲部であるが概してゆるく括れている。21は微隆帯と伴走する沈線で曲線文を描くものである。

第3群土器（第146図2・第145図40）

加曾利B1式土器である。口縁が直線的にのびる深鉢で、口縁は内曲する。外面の口縁下に六条の横線、ややおいて一条の横線がみられる。内面は内曲部をつくりだした太い凹線下に隆帯が配され、ややおいて、四条の平行沈線がみられる。

2はそろばん玉状の脣部となる大形の注口土器である。「く」の字状に括れる屈曲部に接して幅の狭い沈線による文様帯が配される。六条の平行沈線で、上下の一束づつの平行沈線間の沈線が交互に入組んでいる。文様の単位は注口部と反対側にある「8」の字文で二分されている。



第147図 赤生土器拓影図

第145図41、第146図3・4は網代痕のある底部破片である。第41は深鉢で、網代は1本1本越え、1本潜り、第146図3は注口の底部と思われ、1本の1本越え、1本潜りの網代である。4も同様深鉢の底部で、1本の1本越え、1本潜りである。いずれも器形等から掘之内式から加賀利B1式の底部破片であろう。

弥生土器（第147図）

いずれも中期中頃から後半の土器である。1は細口の壺の肩部破片で、肩部で大きく張っている。肩部の文様は太い沈線で重層した菱形文をつらねたものである。2は文様帶下端の二条の沈線がみられる。4は文様帶下から突出した曲線文の一部がみられる。3は胴部破片で斜行する条痕がみられるが、その後器面がなでられ痕跡がうかがえる程度に残っている。

（大和 修）

古墳時代以降の土器（第148・149・150・151図・図版72・73）

土師器

壺（第148図）

1（ドロ山北側）口径13.0cm、器高5.7cm。口縁部40%、底部100%残存。赤彩。胎土には角閃石、浮石、酸化鉄などの微～細粒砂を含み、焼成良く焼きしまる。赤褐色。口縁部横ナデ後、外面ナデ様範削り。1と2は同じものである。

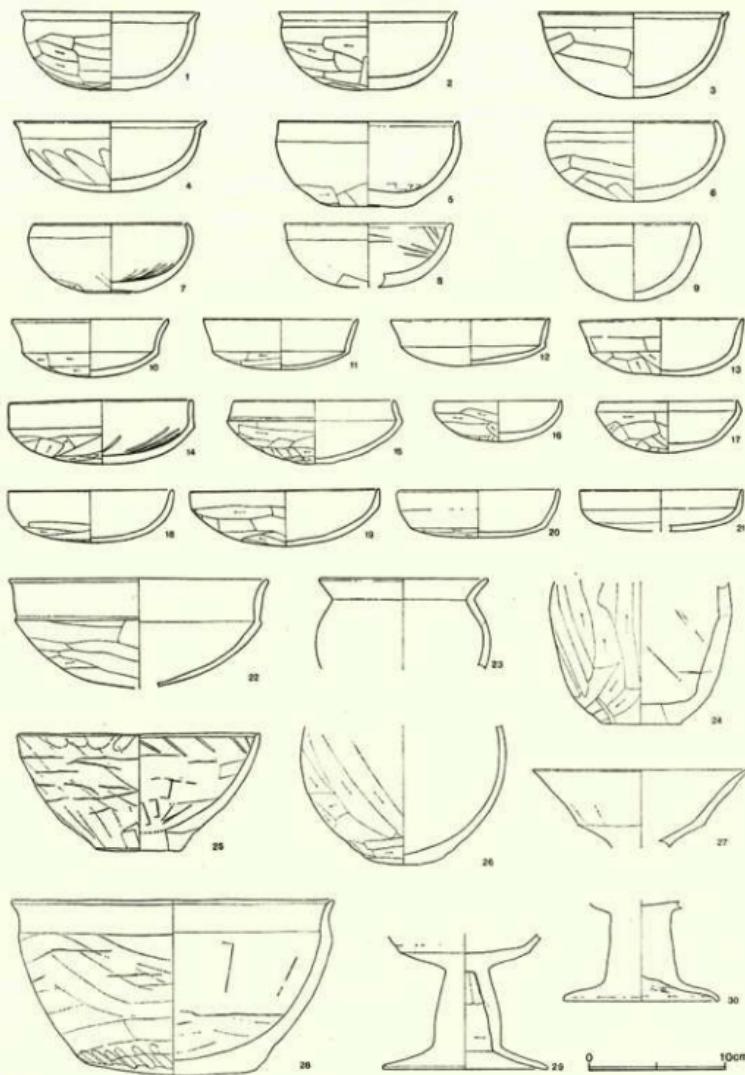
3（第4地点表採一括）口径13.7cm、器高6.1cm。口縁部25%、底部70%残存。胎土には雲母、浮石などの超微粒砂～微粒砂を多く含み、ザラザラした感じ。焼成良。器外面は磨滅する。橙～橙赤褐色、外底面に黒斑。赤彩か？

4（第4地点表採一括）口径14.0cm、器高5.1cm。扁平な器形となる。口縁部30%、底部100%残存。胎土は3に似るが、酸化鉄、石英などの細～粗粒砂を含み、やや軟質となる。内面赤褐色外面橙赤褐色。赤彩か？

5（第7地点表採）口径13.1cm、器高（推定）6.1cm。25%残存。器高は高い。口縁部は内傾気味に直立する。底部は範削りによって、ほぼ平坦に削られる。胎土には角閃石、浮石、酸化鉄などの微～細粒砂の他、粗粒砂～小石を含む。焼成は良く焼きしまる。内面は木口によるナデ。

6（第4地点表採）口径11.8cm、器高5.8cm。ほぼ完形。底部接地面には径2cm程の平坦部をもつ。胎土は精製され、雲母などの超微粒砂と酸化鉄などの細～粗粒砂を含む。非常に軟質で粉っぽい。2次加熱か？ 内外面とも口縁部黄～暗褐色、底部橙赤褐色、内外面磨滅。

7（表採）口径11.1cm、器高5.0cm。口縁部30%、底部100%残存。底部は4.3～4.4cm程に削り出され、上げ底状となる。外面は範削後、範ナデされる。内底面はほぼ放射状に粗く範磨きされる。



第148図 その他の遺物(1)

胎土には浮石、角閃石、酸化鉄などの微～細粒砂と少量の粗粒砂を含み、焼成は非常に良く硬質。橙赤褐色、外面一部暗褐色。

8 (第2地点表採) 口径12.1cm、器高4.6cm。25%残存。胎土は6と同じ、焼成はやや良い。内面には木口ナデ時の痕が横斜位に残る。内面磨滅著しい。

9 (表採) 口径9.2cm、器高5.5cm。約35%残存。小形。器高は高い。胎土は5に似るが、焼成はやや甘い。暗橙褐色。器内厚く、手捏ね風である。内外面に笠ナデつけ痕。外底面は器面剥離。

10 (第4地点表採) 口径11.3cm、器高5.2cm。口縁部30%、底部50%残存。小形で器高が高い。胎土は精製され、酸化鉄、浮石、石英などの微～細粒砂と、僅かに粗粒砂へ小石を含む。焼成は良い。

11 (第7地点表採) 口径11.2cm、器高3.6cm。ほぼ完形。器肉薄い。胎土は10に似るが、焼成悪く粉っぽい。明橙褐色。内外面磨滅。

12 (第7地点表採) 口径11.5cm、器高3.3cm。完形。器形は歪む。胎土、焼成とも11と同じ。明橙褐色。内外面磨滅。

13 は手造りにより、47号住のものが混入した。説明は47号住に載せた。

14 (第7地点表採) 口径13.2cm、器高4.6cm。口縁部25%を欠く。内面には粗い笠磨きが施される。胎土は7に似る。7ほど硬質ではないが、焼成は良い。赤茶褐色、底部内外面は暗褐色を呈する。

15 (表採) 口径11.6cm、器高4.6cm。口縁部28%、底部60%残。器内薄く、つくりは丁寧。胎土は精製され、雲母などの超微粒砂と浮石、酸化鉄などの微粒砂を含む。焼成は比較的良い。暗橙褐色、内外面は黒色処理が施される。

16 (5土山表採) 口径9.1cm、器高3.0cm。口縁部50%、底部100%残存。小形。胎土には角閃石、浮石などの微粒砂を呈む。焼成良。橙褐色。底部より口縁部直下まで笠削り。

17 (表採一括) 口径10.0cm、器高3.7cm。口縁部20%、底部30%残。口縁部直下まで笠削りされる。胎土には角閃石、浮石などの微粒砂を含み、焼成良く焼きしまる。淡橙褐色～橙褐色。

18 (第1地点表採) 口径12.0cm、器高3.8cm。完形。外面は器面荒れ整形痕不明瞭となる。胎土・焼成とも17と同じ。橙褐色、外底部朱色。二次加熱。

19 (無註記) 口径13.6cm、器高4.0cm。口縁部40%、底部100%残。大形で扁平な器形である。口縁部横ナデ後、底部より口縁部直下まで笠削りされる。内面の磨滅著しい。僅かに黒色処理の痕跡を留める。外面にも一部認められる。胎土・焼成は17に似る。

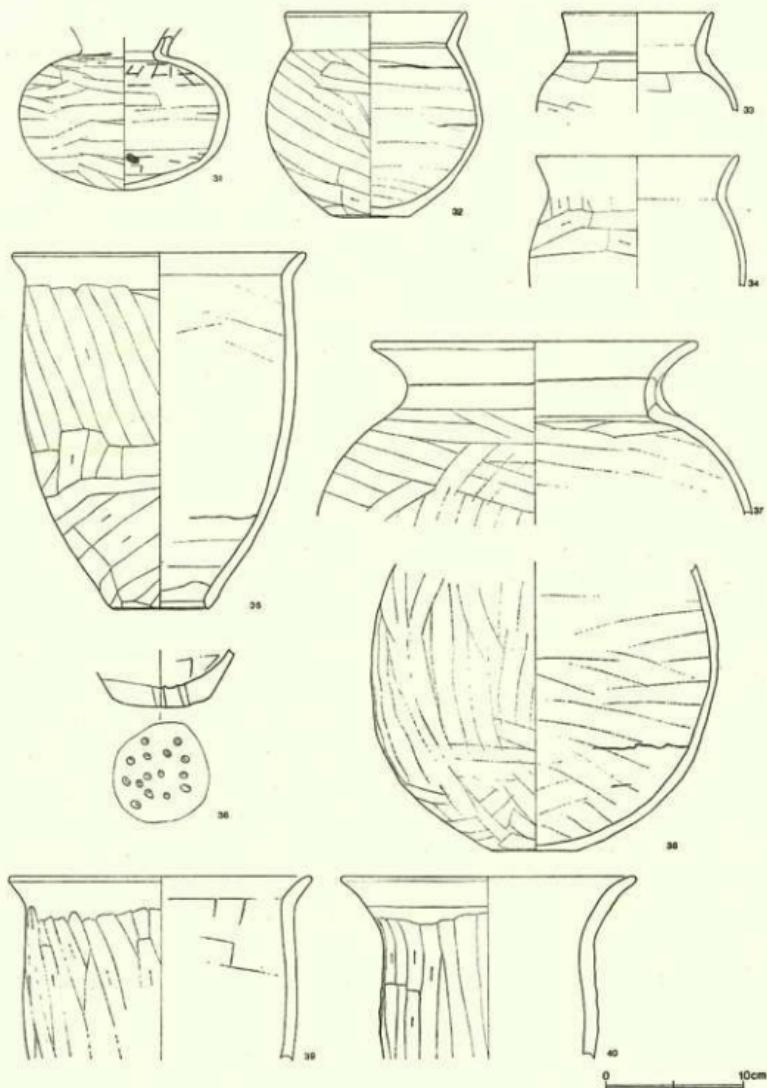
20 (第4地点) 36号住のものと判断した。説明は36号住。

21 (第4地点) 口径11.8cm、器高3.0cm。約40%残。口径対器高比は4:1となり皿形を呈する。底部はほぼ扁平に笠削りされ、口縁部横ナデとの間は開き、笠ナデつけされる。胎土・焼成は7と同じ。橙褐色。

鉢

22 (第7地点) 口径18.6cm、器高8.0cm。75%残。底部と口縁部の境には稜をもち、口縁部はふくらみをもって直立し、先端で外反する。胎土は10に似るが、焼成は甘く軟質である。明橙褐色。

25 (表採) 口径17.4cm、器高8.3cm。口縁部20%を欠く。体部には丸味をもち、小形壺の下半部



第149図 その他の遺物(2)

の様な形態である。外面には巻き上げ痕が残る。胎土も角閃石、浮石などの微細砂の他、石英、片岩などの粗粒砂、小石を含む。橙茶褐色、2次加熱のため、外面朱色～暗褐色、焼成良。

28 (3次表採) 口径23.4cm、器高12.7cm、底径12.6cm。約60%残。大形。つくり、整形はやや雑である。体部下半には、底部を作ったときの指痕が残る。胎土には、雲母、角閃石、酸化鉄、浮石などの微粒砂と、石英などの粗粒砂を含む。焼成は比較的良い。巻き上げは5～6段である。黄～橙褐色、内面朱色～暗褐色で2次加熱により器面荒れる。

高坏

27 (第4地点) 口径15.7cm。坏部のみ約50%残。底部との境には稜をもち、口縁部は中位の粘土の接合部はふくらむが、大きく「ハ」の字状に開く。胎土は精製され、雲母、赤色粒などの超微粒～細粒砂を含み、焼成は比較的良いが粉っぽい感じ。明橙褐色。二次加熱により一部暗橙褐色。

29 (池中) 脚部高12.2cm、裾部径12.0cm。坏底部25%、裾部40%残。坏底部は扁平、脚部は中位にふくらみをもち、裾部は直線的に開く。胎土には角閃石、浮石などの微～細粒砂を多含する。器全面荒れる。二次加熱、朱色。

30 (工事用道路側溝中) 脚部高6.4cm、裾部径11.3cm。脚部100%、裾部30%残。脚部は寸胴で、中空とはならず、裾部は強く開き、接地部で直立気味となる。胎土には、浮石、角閃石、酸化鉄などの微粒砂と、粗粒砂を僅かに含む。焼成良く焼きしまる。橙褐色。

小形壺

23 (第4地点) 口径12.2cm。35%残。小形、胴部はやや扁平となろう。口縁部は「く」の字状に外反する。胎土には浮石、角閃石、石英などの微～細粒砂を含む。焼成良。2次加熱。外面明橙褐色～朱色、内面暗褐色～黒褐色。

24 (第4地点5T北側) 底径5.9cm。約40%残。器高は高い。胎土には角閃石などの微粒砂の他石英などの粗粒砂～小石を多含し、ゴツゴツした感じ。焼成良。内面黒色、外面橙茶褐色。

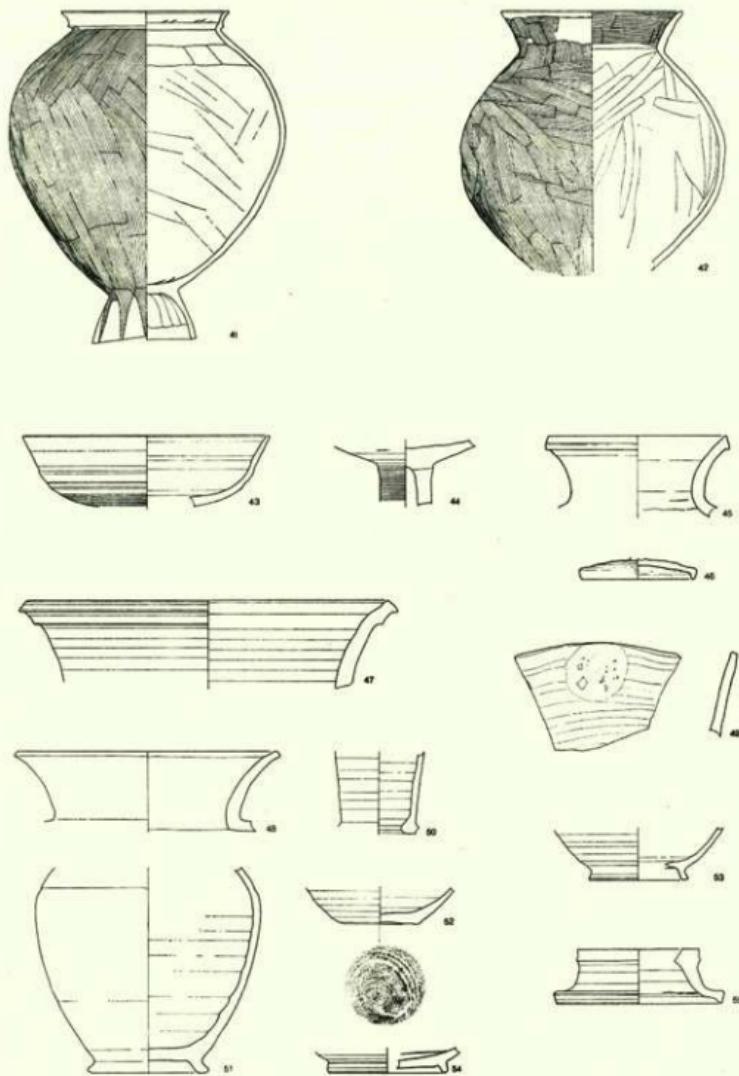
26 (第7地点) 底径5.6cm。底部100%、体部30%残。全体的に丸味をもった器形である。内面胴下半に粗痕が残る。胎土には雲母などの超微粒砂の他、酸化鉄、石英などの粗粒砂を含む、焼成良く焼くしまる。淡橙褐色、底部外面暗褐色～黒色。外面赤茶色か？

31 (第7地点) 胴部最大径15.1cm。口縁部と胴中位30%を欠く。胴部は扁平である。つくり、整形とも丁寧。胎土には雲母、角閃石、浮石、酸化鉄などの微～細粒砂を含み、焼成良く硬質。赤褐色。肩部内面には紋り目痕が残る。

32 (第7地点) 口縁部(推定)12.9cm、胴部最大径(推定)15.5cm、底径5.5cm、器高14.7cm。口縁部3%、胴部30%、底部100%残。胴部は中位に最大径をもち、口縁部は「ハ」の字状に開く。は浮石、角閃石などの微粒砂と石英、片岩、酸化鉄などの細～粗粒砂を多含する。焼成良。2次加熱胎土に熱により器面荒れる。赤茶褐色、内底面は暗褐色。

33 (第7地点) 口縁部10.8cm。60%残。口縁部は長く、肩部に最大径をもつ器形となろう。胎土は28に似るが、焼成は甘く淡橙褐色を呈する。器面磨滅。

34 (第4地点一括) 口径14.6cm。約40%残。胴部のふくらみは弱くなる。口縁部は長く「ハ」の字状に開く。胎土はと似るが、粗く、粗粒砂～小石を多く含む。



第150図 その他の遺物(3)

大形壺

37 (第4地点) 口径33.4cm。口縁部25%、肩部100%残。肩部には丸味をもち、口縁部は大きく外反する。胎土には雲母、浮石、酸化鉄などの微粒砂と、石英、酸化鉄などの粗粒砂、小石を含む。やや軟質。橙茶褐色。

38 (第7地点) 底径12.2cm。底部100%、胸部60%残。底部より胸部は大きく開き、胸部は全体的に丸味をもつ。胎土は33と同じ、焼成良く焼きしまる。赤茶褐色。外面に黒斑。

48 (第4地点) 口径(推定) 18.8cm。約25%残。肩部はほぼ水平となり、強く張るものと思われる。口縁部は大きく「へ」の字状に開く。胎土には雲母、角閃石、酸化鉄、浮石、石英などの微細粒砂を多含する。焼成良く焼きしまる。橙褐色。

瓶

35 (第7地点) 口径(推定) 20.8cm、孔径11.8cm、器高25.5cm。39 (第7地点) と同一個体。胸部には僅かにふくらみをもつが、胴上半は直線的となる。短い口縁部は「へ」の字状に開く。単孔。口縁部横ナデ後、外面上半は継斜位の以下は横斜位のナデ様箇削り、内面は横位の箇ナデつけが施される。胎土には浮石、雲母、酸化鉄などの微粒砂を多含し焼成良く焼きしまる。橙茶褐色。外面に黒斑。

40 (第4地点) 口径21.2cm。25%残。口縁部はちょうど屈曲部にあたり、径はやや大きくなるものと思われる。胸部は僅かに張りをもち、口縁部横ナデより3.5cm程下で括れ、朝顔状に開く、胎土には雲母などの超微粒砂、浮石、酸化鉄などの散、細粒砂、石英などの粗粒砂～小石を多く含む。焼成は比較的良い。

36 (第7地点) 底径7.0cm、孔径0.4～0.8mm。多孔で、法則性をもたずして外面から内面に向って15ヶ所穿けられる。胎土には雲母などの超微粒砂と石英、片岩などの粗粒砂～小石を含む。焼成良。内面淡暗橙褐色、外面黒色。

41・42の五領期の遺物は、第6地点の西の端に現場事務所付近に一括して出土したものである。遺構は不明であった。

41 口縁部100%、胸部70%、底部100%、脚部50%残。S字状口縁。肩部は右上から左下への刷毛目痕、以下を左上から右下へなでおろす。下端では垂直となる。台部は左上から右下へ刷毛ナデを施した後、三角形に磨り消している。胎土には角閃石、浮石、石英、酸化鉄などの微粒砂を多含する。薄手で焼成も良い。口縁部～肩部黄橙褐色、胸部黒褐色、台部朱色を呈し、内面底部に炭化物が付着する。

42 壺 胎土には、細～粗粒砂含み1よりやや粗い。焼成良、器肉はやや厚い。刷毛の単位は1より細かく、下から撫上げるようにして、肩部から胸部へと移行する。しかし、1のような法則性はもない。内面器面剥落、茶褐色、外面に黒斑、内面部分的に黒褐色。口縁部60%、胸部80%残。

須恵器

1 高杯

43 (表採) 口径(推定) 17.8cm、口縁部3%、底部25%残。杯底部は口縁整形具と同様のもので回転ナデされる。底部端には高台の透しを切った箇切り痕が残る。胎土には、微、細、粗粒砂を含



第151図 その他の遺物(4)

む。焼成良。灰色。

44 (表採) 接合部径4.0cm。坏底部25%、脚部33%残。坏底部はほぼ平坦となる。脚部は円筒状で、1~1.5mmの幅で3ヶ所に切り込みが入っている。微、粗粒砂含む。焼成非常に良く硬質。灰青色。サンドイッチ状に割れ口中央部は紫褐色を呈する。

2 蓋

46 (No.1) 脱部径13.1cm、器高1.5cm。つまみを欠くが完形。小形で水瓶の蓋と思われる。胎土には微細粒砂を含み、焼成良い。外面は円形に色調が変わり重ね焼きされたことがわかる。外面灰青紫色、周辺より内面にかけて灰黒色。

3 壺

45 (第3次) 口径12.8cm。28%残。胎土には微細粒砂を多含し、ザラザラした感じとなる。焼成良く硬質。外面灰青色、内面黒色。

47 (第7地点西側拡張区) 口径(推定) 26.0cm。口縁部のみ10%残。口縁部は2段となる。胎土には微細粒砂の他、粗粒砂を多含する。焼成良。淡黄色。内外面赤彩か?

4 長頸壺

51 (表採) 底径8.8cm。底部30%、胸部12%残。胎土には、微細粒砂の他、粗粒砂を含む。焼成良。貼付け高台。底部外面には回転糸切り痕が残る。ろくろ整形。暗灰青色。

5 坎

52 (第2地点) 底径5.6cm。底部のみ100%残。ろくろ水挽き成形。底部には時計回りの回転糸切り痕。胎土には微、細粒砂、小石を含み、軟質。灰色。

6 高台付坎

53 (第2地点) 底径6.7cm、高台径7.2cm。40%残。貼付け高台。ろくろ水挽き成形。静止糸切りか? 胎土には酸化鉄、浮石などの微粒砂の他、僅かに小石を含み、焼成悪く土師質で橙茶褐色を呈する。器内は薄くつくりは丁寧。

灰釉陶器

高台付坎

54 (表採) 底径(推定) 8.5cm、高台径13.6cm。20%残。内面に刷毛塗りで施釉される。内面に重ね焼き時の高台の痕が残る。底部には、微かに静止糸切り痕と思われる痕跡が残る。貼付け高台、胎土は精製され、淡黄灰色を呈し、焼成温度も高く、僅かに含まれる砂粒の一部は溶けて黒色を呈する。釉色は淡緑色。

49・50・55は5地点一括のものである。

紡錘車

石製

56 (第2地点) 短径2.9cm、長径4.0cm、孔径0.7cm、高さ2.0cm。34g。滑石製で黒色。使い込まれ短径部と斜辺部は光沢をもつ。

57 (第7地点) 短径2.0cm、長径4.4cm、孔径0.8cm、高さ2.2cm。64g。滑石製。灰白色。斜辺部は磨られて面取りされる。

土製

58 (表採) 短径4.0cm、長径5.5cm、孔径0.7cm、高さ1.5cm。55g。微、細粒を含みやや軟質。黄灰色。

土鍤

59 (表採) 5.1g。両端を欠く。微、細粒砂を含み焼成良。橙茶褐色。

60 (表採) 6.0g。一端を欠く。角閃石、酸化鉄などの微細粒砂含み焼成は非常に良い。淡橙褐色、一部灰褐色。

61 (表採) 15g。一端を欠く。雲母、酸化鉄などの微細粒砂含み焼成良。橙褐色。

62 (表採) 8g。完形。両端切りおとし形となる。胎土、焼成は60と同じ。

63 (表採) 16g。完形。両端は丸味をもつ。角閃石、酸化鉄などの微細粒砂を含み焼成良。橙褐色。59と同じ。

64 (表採) 22g。一端を欠く。胎土、焼成とも63に似る。

軽石

66 (J一括) 70g。全面磨られて丸味をもつ。角閃石を含む。

小石 (第1地点) 60g。全面磨られて丸味をもつ。

石製品

68 (表採) 中粒砂岩。線刻が施されるが小片のため、形態は不明である。

瓦 (五明庵寺のものと考えられる)

69 (溝第7トレンチ覆土) 平瓦。胎土、焼成は70と同じ。

70 (第3次) 平瓦。胎土には酸化鉄、石英などの微、細粒砂を多含する。焼成良。橙茶褐色。内面は笠ナデ。

71 (第3次) 70と同じもの。

72 (第3次、溝第4トレンチ覆土) 平瓦。内面布目痕、胎土は石英小石含み須恵質。灰黒色。

73 (溝 第2トレンチ) 平瓦。内面には布目痕胎土には浮石、酸化鉄などの微細粒砂を含み、軟質。淡橙褐色。

敲き石

83 火成岩。下部に使用痕。左面に3~4個、右面に4個の窪みをもつ。その他、左面には磨られたような平行線をもつ。

鉄器

75 (第4地点) 著しい錆化による変形のため用途不明。四角形の断面形をもつ棒状製品の端部付近か? 残存長144mm。

3次砂山出土遺物

近世の遺物がまとまって出土した。

74 (表採) 大型甕、須恵質、灰黒色。

76 古瀬戸。胎土は淡黄色。やや軟質。釉は緑色。14世紀前半。

77 13%残。坏部は内外面施釉される。胎土密。暗灰白色。釉は淡緑色。

78 底部のみ残。削り出し高台。細粗粒砂含み淡黄色。坏内面に鉄釉。美濃17C末。

79 底部のみ残。つくりは78と同じ。淡黄色。比較的硬質。坏内面綠釉。

80 大形灰釉盞 20%残。外面底部～体部は回転窓削り。内面施釉。胎土淡黄色。14世紀。

81 楼鉢 20%残。外面体部～底部外周にかけて明茶褐色の釉が施される。内面は約2.5cm幅の梯目痕。胎土は暗灰白色。瀬戸？ 江戸時代。

82 烙培。8%残。雲母、浮石などの微粒砂含む。焼成良。内面暗橙褐色。外面暗褐色。

83 用途不明。中粒砂岩製でもろく、両面に浅い窪みをもつ。片面は平行に磨られた痕が残る。

5 地点一括出土遺物について（第152図）

場所的には若宮台遺跡の範中には入らないNo.39遺跡である。（第2図）5地点一括の資料は第152図の他に第150図その他の遺物(3)の49・50・55がある。

1・2・5・13・14・17はOⅣ期に属するものと思われる。

1 坏

OⅣ-i-4 ①類 2 65%残存。器内薄く焼成も良い。内外面赤彩か？ 胎土は酸化鉄粒目立ち淡橙褐色。

OⅣ-i-5 ②類 5 80%残。底径は小さく、口縁部は肥厚する。橙赤褐色。

2 塚

OⅣ-i-9 類系のもの 1 底部と口縁部の境は稜をもつ。微～細粒砂を含み焼成良く焼きしまる。

3 壺14と13は、OⅣ-i-13類の一つ前の段階と考える。13 100%残。角閃石、酸化鉄、石英、浮石、雲母、片岩などの微～細粗粒砂を含み焼成良く焼きしまる。橙褐色～橙赤褐色。内外面赤彩か？

14 45%残。胎土は精製され、酸化鉄の細粒が目立つ。焼成は良い。明橙褐色。

4 壺

OⅣ-i-16類 17、48%残。胎土は13に似るが、焼成やや甘い。茶褐色。

5 甌

N-i-17②類 18 口縁部40%、肩部50%残。胎土は17と同じ焼成良。茶褐色～褐色。

上記のもの以外の遺物は7世紀後半から、8世紀初頭にかけてのものと考える。

3 口縁部40%、底部60%残。超微粒と細粒砂少量含。2次加熱。橙褐色、朱色～黒色。小形。

4 約30%残。胎土は3に似る。焼成良。明橙褐色。小形。

6 40%残。胎土は3に似る。細～粗粒砂は含まれず密。焼成良。黄橙褐色～茶褐色。

7 口縁部50%、底部80%残。小形。胎土は3に似るが、粗粒砂目立つ。焼成非常に良い。橙褐色～橙赤褐色。

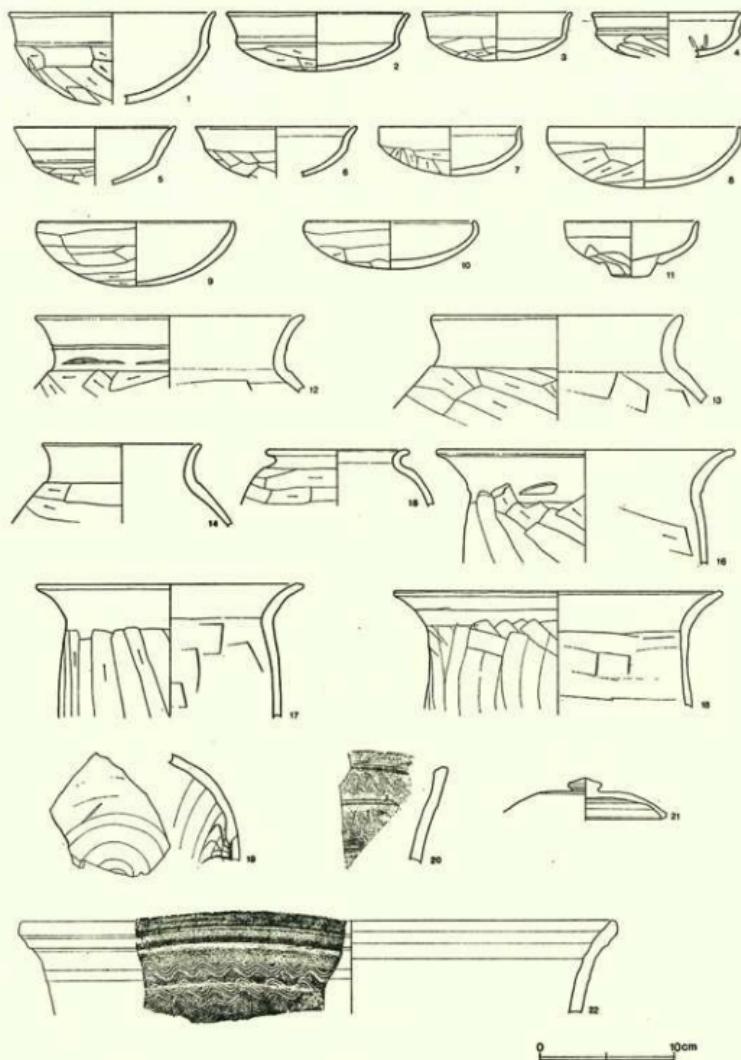
8 約25%残。胎土は6に近い。やや軟質。淡橙褐色。

9 26%残。胎土は3と同じ。橙褐色。

10 60%残。胎土は3と同じ。焼成やや甘い。暗橙褐色。底外面淡褐色。

11 底部70%、口縁部40%残。巻き上げ時に、底部を意識して作った感じの底部である。胎土は6に似る。橙茶褐色。

12 52%残。胎土には角閃石が目立つ。微～細粒砂を含む。焼成は非常に良い。淡橙褐色、内面肩部炭化物付着。



第152图 第5地点一括出土遗物

- 15 23%残。胎土は3の坏と同じ。焼成良。明橙褐色。
- 16 口縁部25%、肩部30%残。胎土焼成は12と同じ。乳橙褐色、内面黒色～黒褐色。
- 須恵器
- 19 横瓶 微、細、粗粒砂含む、焼成良。暗灰青色。
- 21 約25%残。つまみは完存。裾部を欠く。微細粒砂多含。焼成良。明灰黑色、外面に自然釉付着。
- その他の遺物（第150図）
- 49 瓶の口縁部か？ 烧成時に歪む。微細粒砂、小石含む。焼成良。全体に自然釉がかかり、黒光りする。灰黑色。
- 以下須恵器はやや時期が下るものと思われる。
- 50 長頸瓶の頸部。胎土は精製され、焼成も高温で堅緻、外面に鉄釉が施され、一部自然釉も付着する。淡黄色。
- 55 台付盤の台部と思われる。48%残。微粒砂と僅かに粗粒砂含み密。焼成良。暗灰色。外面にうすく自然釉。

第152図20 器種不明、胎土密。明灰色。

22 大甕 口縁部は丸味をもつ。少片。灰色。

第151図65 砥石 石質は細粒砂岩。220g。断面図の下面を除く5面を使用している。

石鎌

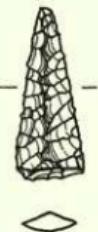
第31号住居跡覆土出土。チャート製。器長30.05mm。基部幅12mm。器厚3mm。

重量 g。

形態はやや長い二等辺三角形を呈し、一見したところでは有舌尖頭器の舌部欠損のように見えるが、舌状の作り出しは認められず、基部は直線的である。

石鎌の形態による時期的分類が明確になされていない現在、併伴する遺物もなく単独で出土した一点の石鎌から時期を判断することは難いが、このような形態のものは早期、後期によくみられ、調整がきれいであることを考えると晚期の可能性もある。

第153図 石鎌
(実大) しかし、本遺跡からは堀之内式を主体とする縄文後期の土器が出土しており、この石鎌は後期のものと考えるのが妥当かと思われる。 (鈴木仁子)



若宮台遺跡遺構一覧表

住居No	平面 プラン	規 模(m)	主軸の方向	カマド	貯蔵穴等	炭化物 焼土等	時 期	備 考
1	方 形	5.0 × 5.0	N—64°—E	○	柱穴 4		鬼高Ⅴ	
2	長方形	4.0 × 4.8	N—86°—E	○			真間Ⅰ：	3住と切り合う
3	長方形	(?) × 5.1	N—94°—E					2住と切り合う
4			N—116°—E				真間Ⅱ：	3・5住と切り合う
5	長方形	(4.5) × (5.0)	N—79°—E				真間Ⅰ：	4・6・7住と切り合う
6	長方形	(3.9) × (4.5)	N—86°—E	○			真間Ⅱ：	5・7住と切り合う
7		(?) × 4.5	N—105°—E				真間Ⅴ	
8		(2.9) × (?)	N—81°—E				鬼高Ⅴ	9住と切り合う
9	長方形	(3.1) × (2.4)	N—82°—E				真間Ⅰ	8・10住と切り合う
10	長方形	3.6 × 4.5	N—87°—E	○			真間Ⅰ：	9・11住と切り合う
11	長方形	5.1 × (3.9)	N—55°—E		柱穴 1			10住と切り合う
12	長方形	3.1 × 3.7	N—116°—E	○			鬼高Ⅳ：	13住と切り合う
13	長方形	(4.5) × (4.8)	N—132°—E				鬼高Ⅳ：	12住と切り合う
14	長方形	4.1 × 3.8	N—71°—E	△			鬼高Ⅳ：	
15	長方形	3.1 × 3.5	N—99°—E	○			鬼高Ⅳ：	土壤 5と切り合う
16	長方形	3.3 × 6.7	N—111°—E	○			国分Ⅱ	土壤 7と切り合う
17	長方形	4.9 × 5.5	N—82°—E	○			真間Ⅴ	
18	長方形	4.4 × 5.5	N—82°—E	○	柱穴 1		真間Ⅳ	
19	長方形	(2.6) × (4.1)	N—65°—E	○			真間Ⅰ	20住と切り合う
20	長方形	(4.2) × (2.9)	N—108°—E	○			国分Ⅱ	21・22住と切り合う
21				○			国分Ⅱ	20・22住と切り合う
22	長方形	(3.9) × (4.0)	N—104°—E	○	柱穴 2		真間Ⅱ：	
23	長方形	3.5 × 4.0	N—58°—E	○			鬼高Ⅰ	24住と切り合う
24	長方形	(3.4) × (3.3)	N—62°—E	○			鬼高Ⅳ：	23住と切り合う
25		3.0 × (?)	N—62°—E					26住と切り合う
26	長方形	4.5 × 5.0	N—62°—E	○			鬼高Ⅳ：	25住と切り合う
27	長方形	3.3 × 3.6	N—91°—E	○				
28	長方形	3.2 × 3.6	N—105°—E	○			真間Ⅱ：	
29	長方形	3.4 × 3.6	N—110°—E	○			真間Ⅱ：	
30	長方形	4.2 × 4.5	N—65°—E	○	柱穴 1			31住と切り合う
31	長方形	4.5 × 3.5	N—65°—E	△	○		鬼高Ⅰ	30住と切り合う
32	方 形	2.2 × 2.2	N—39°—E	○	Pit 1			
33	長方形	2.9 × 3.1	N—79°—E	○	○		真間Ⅰ	
34	長方形	3.5 × (?)	N—73°—E	○		○		
35	(?) × (?)				柱穴 1		鬼高Ⅳ：	一部区域外に出る
36	長方形	5.1 × (?)	N—138°—W	○	Pit 2		鬼高Ⅳ：	36住と切り合う
37	(?) × (?)			△	Pit 3		鬼高Ⅳ：	35住と切り合う
38	(?) × (?)			○			鬼高Ⅳ：	39住と切り合う
39	長方形	5.7 × 5.6	N—64°—E		柱穴 4		鬼高Ⅳ：	38住と切り合う
40	長方形	7.2 × 5.4	N—32°—W	○	○	○	鬼高Ⅳ：	燒失住居
41	長方形	(?) × 6.0	N—76°—E	○			鬼高Ⅳ：	42・43住と切り合う
42	(?) × (?)		N—90°—E	○			鬼高Ⅴ	41・43住と切り合う
43	(?) × (?)		N—95°—E	○			真間Ⅰ	41・42住と切り合う
44	長方形	(3.1) × 4.5	N—92°—E	○			国分Ⅱ	45住と切り合う
45	長方形	(4.1) × 4.8	N—68°—E			○	鬼高Ⅳ：	42・44住と切り合う

住居No	平面 プラン	規 模(m)	主軸の方向	カマド	貯藏穴等	炭化物 焼土等	時 期	備 考
46	長方形	4.8 × 5.6	N—90°—E	○	○	○	国分 I	焼失住居
47	長方形	4.5 × 4.6	N—32°—W	○	○ Pit 3	○	鬼高 II	焼失住居
48	長方形	2.3 × 3.3	N—111°—E	△	Pit 1			
49		2.3 × (?)	N—109°—E	○			鬼高 IV	50住と切り合う
50		4.2 × (?)	N—107°—E	○			鬼高 I	49・51住と切り合う
51		4.1 × (?)	N—98°—E	○			鬼高 IV	50・52住と切り合う
52	長方形	2.8 × 4.0	N—105°—E	○	Pit 1			
53	長方形	(4.9) × 4.7	N—116°—E	○			真間 II	54住と切り合う
54		(?) × 4.4	N—116°—E	○			真間 II	53住と切り合う
55	方 形	3.9 × 3.9	N—78°—E	○	柱穴 1		鬼高 IV	
56	長方形	2.6 × 3.6	N—112°—E	○			国分 II	
57	長方形	4.1 × 3.4	N—80°—E	○	○		真間 II	
58	長方形	4.8 × 5.3	N—113°—E	○	○ 柱穴 3		真間 I	
59	長方形	5.9 × 5.6	N—93°—E	○	○		鬼高 IV	
60	長方形	3.4 × 3.9	N—93°—E	○			真間 II	61住と切り合う
61	長方形	6.6 × 6.4	N—22°—W	○			真間 I	60住と切り合う
62	長方形	4.0 × 4.6	N—70°—E	○	○		鬼高 V	61・63住と切り合う
63	長方形	4.6 × 5.0	N—47°—E		柱穴 3		鬼高 I	61・62住と切り合う
64	長方形	3.5 × 3.1	N—47°—E		○ 柱穴 1		鬼高 I	61住と切り合う
土壤 1	長方形	2.8 × 2.6	N—69°—E				鬼高 I	
2	長方形	3.7 × 3.0	N—14°—W				真間 II	集石
3	長方形	2.8 × 2.4	N—5°—E					
4	長方形	2.4 × 2.1	N					土壤 5 と切り合う
5	長方形	(2.0) × (1.1)	N					15住・土壤 4 と切り合う
6	長方形	2.5 × 1.3	N—90°—E					
7		2.5 × (?)	N—17°—E					16住と切り合う
8		3.9 × (?)						
9		2.7 × (?)						
10	長方形	2.8 × 1.1	N—10°—E					
掘 立	長方形	2.2 × 2.1	N—26°—E					48住と切り合う

住居跡新旧番号対照表

新	旧	新	旧	新	旧	新	旧	新	旧	新	旧
1	1	14	16	27	34	40	47	53	70	70	62
2	2	15	17	28	33	41	50	54	71		
3	3	16	25	29	27	42	54	55	72	土 壤	
4	17	17	20	30	75	43	53	56	69	1	7
5	5	18	22	31	74	44	48	57	68	2	8
6	4	19	29	32	73	45	57	58	67	3	15
7	6	20	28	33	31	46	46	59	66	4	18
8	11	21	36	34	試掘 1	47	64	60	42	5	19
9	10	22	30	35	56	48	63	61	39	6	21
10	9	23	23	36	51	49	65	62	40	7	26
11	12	24	24	37	52	50	61	63	41	8	—
12	13	25	35	38	58	51	60	64	38	9	—
13	14	26	32	39	49	52	59			10	55

V 結語

1 若宮台遺跡出土遺物について

本遺跡からは、形態のわかるもので概ね900～1000個体の土器類が出土している。その他、紡錘車12点、その中には、年号の線刻されたものなどがある。土鍤15点、保存状態が悪く、図示できるものは少なかったが、鉄製品も多数出土している。

(1) 土師器について

本遺跡出土の土師器は、古墳時代から平安時代まで、途中、僅かにエポックがあるものの、連続と統一していることが明らかとなった。しかし、住居跡の切り合いが多いうえ、発掘時の困難さや、時間的な制約もあり、各住居跡出土の遺物をそのまま扱ったので、挿図には混入したままの状態で載っていることをお詫びしておきたい。土器の分類にあたっては、住居跡の重複関係や遺物の出土状態などにより判断した。編年については、本遺跡の遺物のみを扱ったものであり、全体的な編年観ではないことをお断りしたい。

分類、編年は小川良祐が行ない、執筆は鈴木仁子が担当した。

(2) 須恵器について

出土量は多くはないが、46・58・60号住出土のもののように、まとまって、ほぼ完形に近い状態で検出されている。しかし、小片から図にしたものや、住居跡の重複関係が不明なところもあり、同一住居内の他の遺物とは年代観が必ずしも一致しない場合もあった。須恵器についてここでは詳しい分類、編年は避け、事実記載に留めた。

(3) 若宮台遺跡出土土師器の分類と編年について

土器の分類上、鬼高期（古墳時代～5世紀末葉）真間期（7世紀終末～8世紀初頭・奈良時代）国分期（平安時代）とした。

なお、以下の本文中の挿図は甕・壺・瓶・鉢類の大形のものは縮尺を $\frac{1}{6}$ とし、図右脇に●で表示し、他は $\frac{1}{4}$ に統一した。

2 分類と編年

鬼高第Ⅰ期（O1）5世紀末葉

第23・31・39・40・45・50・63号住居跡

1 壺



O1-1 31-1 口径11.8 器高4.9cm

丸底で縁をもち口縁部が内傾するもの、胎土には砂粒少なく、浮石、酸化鉄などの微粒砂と僅かに粗粒砂を含む、焼成良、橙～橙茶褐色。



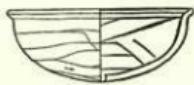
O I—2 類 40—19 口径13.2 器高4.5cm

丸底で稜をもち、口縁部は長くほぼ直立するもの。胎土には角閃石浮石、酸化鉄などの微粒砂と石英などの粗粒砂を少量含む。内外面赤彩。



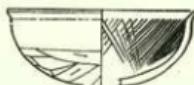
O I—3 類 40—20 口径14.2cm

稜をもち、口縁部は長く内湾して開く。胎土、焼成は2類に似る。橙褐色、外面一部黒褐色。



O I—4 ①類 40—4 口径13.1 器高5.2cm

丸底で深く、短い口縁部は強く外反し、端部は直立する。図示しなかったが、体部内面に横斜位に範磨き痕が僅かに残っている。胎土には、角閃石、浮石、酸化鉄などの微粒砂と、粗粒砂～小石を僅かに含む。



O I—4 ②類 45—2 口径13.4 器高5.4cm

①類よりやや大形で、短い口縁部が「ハ」の字状に開く。胎土は①類に似るが、酸化鉄粒が目立つ。やや軟質。橙赤褐色、口縁部整形横ナデ以下は範ナデ整形、内面に暗文。



O I—4 ③類 40—6 口径13.2cm

扁平な器形で、口縁部外面の括れが甘い。器肉薄い。胎土は①類と同じであるが焼成はより良く焼きしまる。橙茶褐色、口縁部内面黒褐色。



O I—5 ①類 40—15 口径13.0 底径4.8 器高5.4cm

平坦な底部をもち、体部は内湾しながら大きく開き、境に稜をもって口縁部は強く内傾する。胎土は2類と同じ。焼成良。黄褐色、内外面に黒斑。外面赤彩か？口縁部横ナデ、外面ナデ様範削り。



O I—2 ⑤類 40—13 口径12.7 底径4.5 器高5.6cm

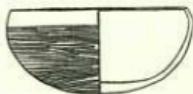
器高はやや深く、体部と口縁部の境の稜は甘くなる。胎土、焼成は4①類と同じ。橙褐色。

2 壺



O I—6 類 45—1 口径12.6 底径3.4 器高6.0cm

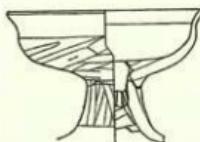
平坦な底部。体部は丸味をもって開き、口縁部はやや外傾する。器高は高い。胎土は精製され、角閃石、雲母などの超微粒砂と、酸化鉄、浮石などの微粒砂を小量含み、焼成はやや甘い。外面は範ナデつけにより光沢をもつ。内外面赤彩。底部外面に黒斑。つくりは丁寧。橙赤褐色。



O I - 7 類 63-2 口径12.8 器高6.0cm

丸底で深く、境に稜をもたず短い口縁部は内傾する。外面に篦磨きが施される。胎土・焼成は6類に似るが僅かに砂粒多い。内外面赤彩。

3 高杯



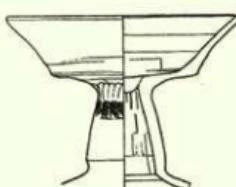
O I - 8 類 39-5 口径14.2 接合部径4.2cm

杯底部は丸味を持ち、口縁部は一度立ち上がってから開く。接合部の径は大きく、脚部は短い。胎土には角閃石、浮石などの超微粒砂と、酸化鉄、石英などの細～粗粒砂を少量含む。淡黄褐色、外面に赤彩。杯部と脚部の中央に粘土塊を入れて柄としている。その後内外面を粘土で補強する。口縁部と脚裾部横ナデ、外面篦ナデ、脚内面は篦削りによって絞り痕を消す。



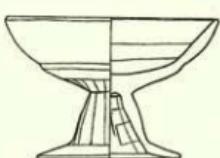
O I - 9 ①類 39-6 口径16.8 底部10.8 接合部径3.8cm

和泉期の特徴をもったもので、杯底部より段をもって口縁部は大きく開き、先端はやや立ち気味となる。接合部の径は小さく、脚部は長い。胎土は精製されて非常に細かい。焼成も比較的良い。杯内面は暗文風篦磨き。赤褐色。脚内面に巻き上げ痕。



O I - 9 ②類 40-27 口径17.0 底径10.6 接合部径4.4cm

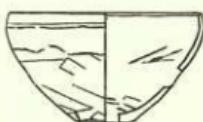
杯底部は平坦となり、口縁部は大きく「ハ」の字状に開く。脚部には丸味をもち、一担括れて据部へと移行する。脚外面上部は面取りされ、斜位の刷毛ナデが施される。胎土、焼成は①類と同様である。



O I - 10 類 40-29 口径15.4 底径10.0 接合部径3.2 据部径10.4cm

脚部よりも杯部の方が器高が高い。全体部に丸味をもつ。胎土には浮石、酸化鉄、石英などの微～粗粒砂を多含し、焼成も非常に良く焼きしまる。暗橙褐色、外面に黒斑。口縁部と据部は横ナデ外面杯底から脚部は縦位の篦ナデ、脚内面篦削り。

4 鉢



O I - 11 類 40-26 口径14.0 底径3.6 器高8.8cm

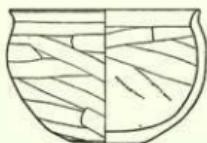
底径小さい。体部は大きく開き口縁部は内傾する。外面巻き上げ痕が残る。胎土は7類と同じ。焼成は良く焼きしまる。橙褐色、口縁部内外面に煤付着。薄手でつくりは丁寧。

5 小形壺



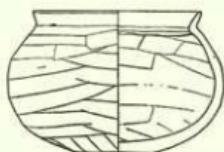
O 1-12①類 40-24 口径11.6 器高6.8cm

丸底で扁平な胴部より一担括れて短い口縁部は開き気味に直立する。胎土は2類に似る。焼成良く硬質。外面橙赤褐色一部黒色、内面処理。口縁部横ナデ、外面笠削り、内面笠ナデつけ。



O 1-12②類 40-22 口径13.6 底径5.2 器高9.6cm

底部は平坦となり、器高は高く、最大径を胴上半にもち、緩く括れて短い口縁部は外反する。胎土には微粒砂の他、石英などの小石を含む。焼成は比較的良い。黄褐色、2次加熱のため外面は朱～黒色部をもつ。内面上半に焼付着。



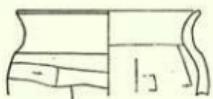
O 1-12③類 40-31 口径12.1 底径5.4 器高9.6cm

底部平坦。最大径を胴中位よりやや下にもち、扁平な器形となる。一担括れて口縁部は「へ」の字状に開く。胎土は2類と同じ。焼成は比較的良い。橙褐色、底内面褐色。



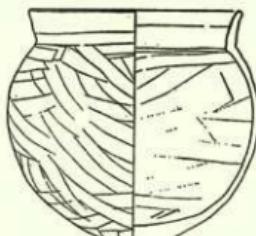
O 1-13類 31-4 口径8.4 腹最大径15.4cm

和泉期の形態を残すもので、胴部は球形を呈し、口縁部は直線的に開き口唇部で立上がる。胎土は精製され、雲母、角閃石などの超微粒砂と酸化鉄、浮石などの細～粗粒砂を僅かに含む。焼成はやや甘い。暗文風に笠磨きされる。赤彩。黄褐色～赤褐色。



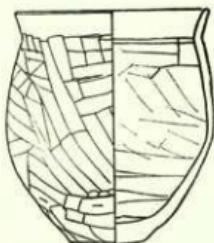
O 1-14類 45-8 口径13.2cm

いわゆる壺形を呈するもの。口縁は外反する。胎土には角閃石、浮石、酸化鉄などの微細粒砂と粗粒砂を含む。焼成も比較的良い。橙褐色。

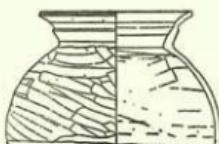


O 1-15類 45-17 口径15.4 最大径18.1 底径5.0 器高16.2cm

底部は中央部僅かに上げ底となる。胴部は球形に近い。口縁部は直立気味に開く。胎土は11②類に似る。黄橙褐色。2次加熱により外面朱色～暗褐色。



6 大形壺



O | -17 頭 40-34 口径21.6 最大径31.0cm

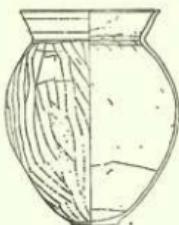
和泉期の特徴を残すもので、二段口縁となる。胴部は球形に近い胎土には浮石、酸化鉄、角閃石などの細粒砂と粗粒～小石を僅かに含む。焼成良く焼きしまる、橙褐色～暗褐色。外面には黒斑が2箇所にある。



O | -18 頭 40-35 口径22.4cm

17類と似るが、二段口縁ではなくなり、肩部は強く張るため胴部の形態も変化し、上半に最大径をもつものと思われる。胎土に含まれる砂粒は17類よりも細く、焼成もやや甘い。

7 壺



O | -19① 頭 45-14 口径20.0 最大径25.0 底径6.8 器高30.8cm

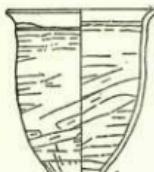
底部は平坦、胴上半に最大径を有し、卵形を呈する。頭部で括れ口縁部は内湾気味に大きく開き、先端で更に開く。胎土は14類と同じ。焼成良、茶褐色。外面に $20 \times 20\text{cm}$ の黒斑が2つ並ぶ。器肉は均一で丁寧なつくり。肩部外面は継斜位の笠削り調整。



O | -19② 頭 63-3 口径14.6 最大径21.6cm

最大径を胴中位にもち、太鼓形となる。口縁部は「へ」の字状に開く。胴内面には巻き上げ痕が顕著に残る。外面胴上半は粗く笠ナデつけされる。あるいは壺と呼ぶべきかもしれない。胴下半は笠削り。胎土には角閃石、酸化鉄、浮石の微～細粒砂を含む。焼成は比較的良い。橙茶褐色。

8 瓶



O I-20類 45-18 口径21.6 孔径7.8 器高23.6cm

大形。単孔。胴部は中位に最大径をもち、底部へかけては緩やかに窄まり、上半ではほぼ垂直に立ち上がり頭部は括れず、短い口縁部は「ハ」の字状に開く。胎土は19②類に似る。焼成良好。内外面赤彩。外面には長方形の黒斑が対面してある。



O I-21類 40-47 口径21.8 最大径19.0 孔径7.8 器高21.4cm

孔径は19類と同じであるが、器高は低く胴部に丸味をもつ器形となる。頭部は僅かに括れ、口縁部は長く「ハ」の字状に開き、先端は立ち上がる。胎土には浮石、角閃石、雲母などの微細粒砂を多含し、酸化鉄の粗粒～小石を少量含む。焼成は非常に良く焼きしまる。茶褐色。外面口縁部より胴下半部まで長方形の黒斑、口縁部内面に刷毛ナデが一周する。内面胴部も丁寧に箒ナデつけされる。外面は継ぎの箒削り。

鬼高第Ⅰ期（O II）6世紀後期

第47号住居跡

1 瓶



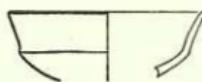
O II-1①類 47-3 口径12.2 器高5.5cm

丸底で稜をもち、口縁部は長くほぼ直立する。胎土には浮石、酸化鉄などの微粒砂含み密。焼成も良い。丁寧なつくり。橙赤褐色。



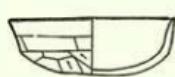
O II-1②類 47-6 口径14.2 器高7.4cm

大形。胎土・焼成は①類に似る。



O II-2①類 47-2 口径14.2cm

丸底で緩い稜をもち、口縁部が開くもの。胎土には砂粒非常に少ない。橙茶褐色。赤彩か？



O II-2②類 その他の遺物-13 口径11.8 器高4.1cm

底部の器高は低くなり、緩い稜をもって口縁部は開き、いわゆる蓋形を呈するもの。胎土は2①類と同じ。焼成は良い。口縁部横ナデ、底部箒削り、口縁部外面箒ナデされる。手違いで図はその他の遺物に混入した。



O II-3類 47-5 口径12.4 器高(推定) 4.9cm

丸底。体部と口縁部の境の稜は不明瞭となり、短い口縁部は僅かに内湾する。胎土には酸化鉄の細粒砂が目立つ。砂粒少ない。軟質で粉っぽい。明橙茶褐色。

2 高杯



O II-4類 47-9 接合部径4.2 補部径9.3 脚高4.4cm

接合部径は大きく、脚部は非常に低い、補部も比較的短い、胎土焼成は3類と同じ。

3 小形壺



O II-5類 47-13 底径7.6cm

O I-16類系のもの。やや大形。底部は中央でやや突出する。胎土は砂粒多くザラザラした感じ。外面暗褐色、内面茶褐色。

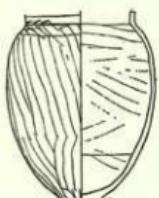
4 大形壺



O II-6類 47-11 口径17.6 最大径20.2 底径7.2 器高21.8cm

O I-17類系のもの。底部は平坦で、胴部はやや扁平な球形となる。口縁部には2段口縁の名残りとも思われる微かな突帯が回る。胎土は1①類と似るが、砂粒は細くなる。焼成良。橙茶褐色、内面暗褐色。2次加熱で、口縁部黄褐色となる。

5 壺



O II-7類 47-12 底径5.6cm

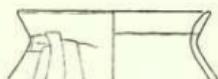
O I-19①類系のもの。器高は高く、寸胴となる。胎土は1①類に似るが、石英などの粗粒砂～小石を少量含む。焼成はやや甘い。外面赤彩か？

6 瓶



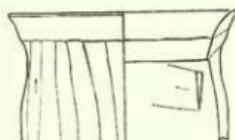
O II-8 類 47-14 口径18.8 底径7.2 器高25.2cm

O I-20類系のもの。甕類同様、器高は高く寸胴となる。頸部は緩く括れる。口縁部も長く、直立気味に開く。胎土は7類に似る。焼成良く焼きしまる。外面は縱位の笠削り。内面木口ナデ。



O II-9 類 47-7 口径13.6cm

31号住で載せそこなった變形の瓶。胎土、焼成とも8類と同じ。暗茶褐色。



O II-9 ②類 47-10 口径16.4cm

O I-21類系のものか？寸胴となる。頸部は緩く括れ。口縁部は「ハ」の字状に開く。胎土、焼成8類と同じ。器肉厚い。黄褐色～橙褐色。

鬼高第Ⅲ期（O III）6世紀後期

第13・27・36号住居跡

1 坯



O III-1 ①類 36-1 口径12.8 器高5.2cm

口縁部と底部の高さはほぼ同じ。丸底で口縁部との境の稜は曖昧になり、口縁部は直立気味に開くもの。胎土には、雲母などの超微粒砂と酸化鉄の微粒砂を含むが、量は非常に少ない。軟質。つくりは丁寧。



O III-1 ②類 36-10 口径12.5 器高4.95cm

口縁部は一度ふくらみをもって立ち、先端で外反するもの。



O III-1 ③類 36-8 口径12.2 器高5.6cm

底部は中央部が突出する形態となり、底部の器高の方が高くなる。口縁部は一度内傾してから外反する。口縁部横ナデ後、底部笠削り。赤彩か？



O III-2 ①類 36-24 口径15.7 器高6.2cm

底部と口縁部の境には鋭い稜をもち、口縁部は微妙に段をもって外反する。接地面は扁平となる。



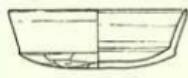
O III-2 ②類 36-3 口径13.2 器高5.3cm

底部は中央が突出し、口縁よりも器高は低い。境の稜は鋭く、口縁部は微妙に段をもち「ハ」の字状に大きく開く。



O III-2 ③類 36-23 口径12.4 器高5.2cm

形態は2 ②類に似るが、全体に丸味をもつ。口縁部先端は直立する。胎土には砂粒の量少なく、軟質で粉っぽい感じ。磨滅が激しい。
2次加熱か？



O III-3 類 36-26 口径12.9 器高4.25cm

底部は扁平となる。口縁部との境の稜は曖昧で、一坦窪んで口縁部「ハ」の字状に開く。赤彩。つくりは丁寧で、焼成も良い。



O III-4 類 36-27 口径10.6 器高3.5cm

O III-3 類系のもの、器形は小形化して扁平となる。口縁部は短く、内湾する。口縁部横ナデ、以下笠削り、内面木口ナデ。

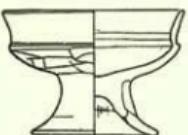
2 塙



O III-5 類 13-2 口径9.0 器高5.8cm

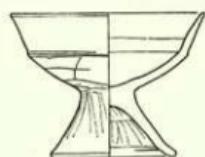
小形で底部は平坦となる。体部はあまりふくらまず、口縁部は内傾する。胎土は精製され砂粒少ない。軟質で粉っぽい。黄橙褐色～暗褐色。内面赤彩か？

3 高杯



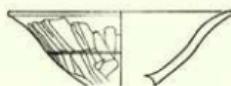
O III-5 類 36-33 口径13.0 接合部径5.1 底部9.1 器高9.8cm

O III-4 類系のもの。杯部は1類に似る。接合部径は大きく、脚部と杯部の器高はほぼ同じとなる。口縁部はやや開く。胎土には砂粒の混入少なく粉っぽい。軟質。明橙褐色。



O III-7 ①類 36-31 口径14.0 接合部径3.8 裙部径9.0 器高10.3cm

口縁部の器高の方がやや高い。接合部径は小さく、杯部は2 ②類に類似し、脚部は杯部に似せたように大きく「ハ」の字状に開く。
裾部は微妙に括れてから開く。



O III-7 ②類 36-36 口径16.2cm

杯部は更に開く形態となる。底部と口縁部の境は、一条の沈線で画される。

4 鉢



O II-8 類 13-6 口径22.8cm

最大径を口縁部にもち、頸部は括れ、胴上半に口径より僅かに小さくなる胴部最大径をもち、以下は急激に窄まる器形となる。胎土には角閃石、浮石、酸化鉄などの微粒砂の他、粗粒～小石を含む。焼成やや甘い。

5 小形壺



O II-9 類 36-54 口径9.8cm

胴部最大径を下半にもち、緩やかに頸部へ移行し、頸部は緩く括れて、短い口縁部は直立気味に開く。



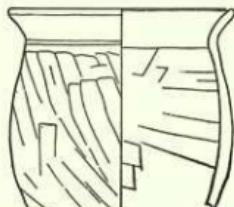
O II-10①類 36-45 口径11.6cm

口縁部は長く、微かに2段口縁となる。球形胴部が想定される。



O II-10②類 36-44 口径10.4cm

口縁部は一度直立気味に開き、丸味をもった段を有し、更に内湾して内傾し、先端は外反する。2段口縁の変形又は、他地域からの搬入品と思われる。口縁部は最低3段階に横ナデされる。肩部外面範ナデ、内面も木ロナデつけ。



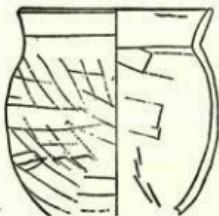
O II-11類 36-55 口径16.3 胴部最大径16.3cm

いわゆる變形を呈するもの。器肉は分厚く、胎土に含まれる砂粒は比較的少なく、やや粉っぽい感じのするもの。焼成は良い。



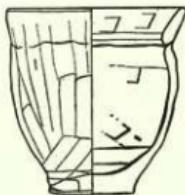
O II-12類 36-43 口径11.6 胴部最大径12.6 底径4.3 器高12.1cm

小形。最大径をほぼ中位にもち、口縁部は長く「ハ」の字状に開く。器肉厚い。



O III-13①類 36-53 口径13.7 最大径15.4cm

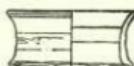
O I-16類系のもの、大きさはほぼ同じであるが胸部には丸穴をもち、口縁部は直線的に開く。



O III-13②類 13-4 口径14.0 底径6.0 器高14.4cm

小形。頸部の括れは暖昧となる。口縁部は直線的に開く、胎土は8類に似る。焼成は比較的良好。橙褐色～暗褐色。器肉分厚い。

6 大形壺



O III-14類 36-48 口径（推定）18.3cm

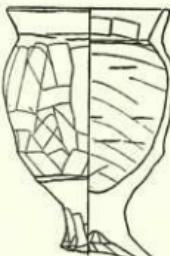
口縁部は非常に長い。微かに2段口縁となる。口唇部は丸くなる。赤彩。胎土には角閃石、酸化鉄などの微～細粒砂含む。焼成良好。

O III-15類 36-46 口径20.8 胴部最大径30.0cm

O I-17類系のもの、やはり口縁部は長くなり、2段口縁ではなくなる。胴部の形態はほぼ同じ。胎土には角閃石、酸化鉄の細粒砂、小石大の浮石を含み、黄褐色を呈する。対面して黒斑。赤彩。



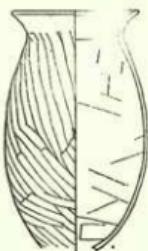
7 台付甕



O III-16類 13-3 口径11.8 接合部径4.4 胴最大径12.4cm

脚部は6類の高壺に似る、甕部は13②類と同じ、胎土には浮石、酸化鉄、角閃石などの微細粒砂を多含し、ザラザラした感じ。焼成良く焼きしまる。外面2次加熱のため器面荒れる。黄～暗褐色。内外面赤彩か？

8 瓢



O III—17類 36—62 口径17.8 孔径最大20.5 器高（推定）
35.8cm

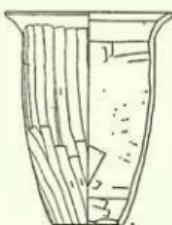
O II—7類系のもの。最大径を胴中位にもち、上下均等に窄まる形態となる。器高は高い。口縁部は長く、大きく外反する。胎土には角閃石などの細粒砂、小石大の浮石を含み、焼きしまる。

9 瓶



O III—18①類 13—8 口径23.6cm

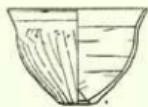
口縁部は短かく、胴部は直線的にやや開く。胎土は8類と同じ。
焼成やや甘い。橙褐色。



O III—18②類 36—71 口径24.0 孔径10.0 器高3.6cm

O II—8類系のもの。大形となる。口縁部は長く外反する。胎土には6×7mm前後の浮石が目立つ。

10 小形瓶



O III—19類 36—67 口径20.2 孔径5.2 器高13.6cm

鉢形を呈する。口径は大きいが、孔径は小さい。器内薄い。胎土には僅かに砂粒含み、2③類と同じ。孔は底部をつくり出してから穿れる。



O III—20類 36—68 口径14.9 孔径2.0 器高10.85cm

非常に小形・鉢形、孔径も非常に小さい。胎土には酸化鉄粒目立ち、焼成は非常に良く焼しまる。整形は難となる。

鬼高第Ⅳ期（O IV:）（6世紀末葉）

第12・38・41・55・59号住居跡

1 坯



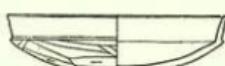
O IV: - 1類 55-1 口径13.2 器高4.2cm

扁平な器形、口縁部よりも底部の器高の方が高い。境には鋭い稜をもつ。口縁部はやや内傾する。胎土には角閃石、雲母などの微粒砂と石英などの小石を含む。焼成ふつう。つくりは丁寧。口縁部横ナデ、底外面笠削り、内面木口ナデ。淡橙褐色。内外面とも黒良処理される。



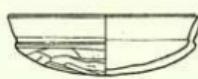
O IV: - 2類 55-16 口径13.2 器高4.5cm

扁平で口縁は直立気味にやや開き、図とはやや趣きを異なる。2°程開く。口縁部の横線には余り意味がない。先端は内側につままれる。赤彩、胎土には角閃石、浮石などの微粒砂と、細～粗粒砂含み、焼成も比較的良い。橙褐色。底部に黒斑。



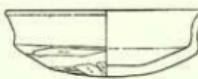
O IV: - 3①類 55-7 口径16.0 器高4.1cm

扁平で大形。境には鋭い稜をもち、つくりも丁寧。口縁部は微妙に2段口縁風となる。胎土は16と同じ。内外面黒色処理される。



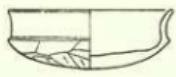
O IV: - 3②類 55-2 口径14.2 器高4.3cm

底部の器高の方が高い。境の稜は曖昧となり、口縁部は「ハ」の字状に開く。口縁部先端は内側に斜めになでられる。胎土は3①類に近いがより細い。淡灰褐色。



O IV: - 4①類 55-5 口径14.7 器高4.9cm

器肉分厚い。底部の方が器高低い。口縁部は一度内傾気味に立ち上がってから強く外反する。胎土には角閃石などの微粒砂の他、白色針状物質が認められ、石英、片岩などの粗粒砂、小石を含む。焼成も比較的良い。



O IV: - 4②類 38-7 口径12.0 器高4.3cm

4①類の小形のもの。



O IV: - 5①類 55-14 口径14.2 器高4.7cm

底部の方が器高が低く、底部中央がやや突出する器形となる。口縁部は「ハ」の字状に開き、先端はつまみ出される。胎土は2類と同じ、焼成良く焼きしまる。赤彩。赤茶褐色、内面60%褐色。



O IV-5 ②類 55-11 口径10.6 器高4.0cm

小形のもの。胎土には角閃石、酸化鉄、浮石などの細粗粒砂含み焼成良。赤彩。



O IV-6 類 38-4 口径11.8 器高(推定)4.6cm

底部の器高は更に低く、鋭い稜をもって緩い段をもった口縁が「へ」の字状に開く。胎土・焼成とも5②類と同じ。



O IV-7 類 55-17 口径11.1 器高(推定)4.0cm

O III 4 類系のもの。丸底で、口縁部は直立する。胎土には角閃石、酸化鉄、浮石などを含み、焼成も比較的良い。

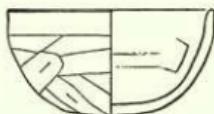
2 塚



O IV-8 類 38-13 口径13.5 底径4.0 器高6.1cm

O I-6 類系のもの。体部は直線的な開きとなる。胎土には角閃石、酸化鉄などの微細粒砂含み非常に密。整形も丁寧でなめらか。焼成も比較的良い。

3 鉢



O IV-9 類 55-30 口径14.8 底径6.8 器高7.6cm

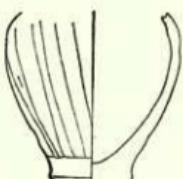
底径は大きく、中央部でやや突出する。体部は下半に僅かなふくらみをもって立ち上がり、口縁部は直立する。胎土には、微・粗粒砂・小石を多く含む。焼成良、内面黒色処理(炭素吸着)。外面もほとんど黒色、一部橙褐色。

4 小形壺



O IV-10 類 55-31 底径5.4cm

底径は大きく、体部はほとんど開かずに、肩部で張り出し、頸部へと続く。器肉分厚い。



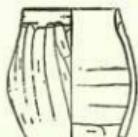
O IV-11 類 55-26 底径5.8cm

いわゆる壺形で、肩部に張りをもち、底部は窄まる。



O IV:—12①類 55—18 口径11.4 底径4.4 器高12.2cm

底部突出。最大径を胴下半にもつ、頸部の括れは曖昧で、短い口縁部は外反する。



O IV:—12②類 55—40 口径13.7cm 最大径18.8cm

他に余り類例のない器形である。胴部中位に最大径をもち、上下に同じように直線的に窄まる。頸部の括れはほとんどなく、口縁部は内傾し、先端で直立する。



O IV:—13類 55—25 口径15.2cm 最大径17.2cm

いわゆる菱形を呈するが、頸部の括れは曖昧で直立し、短い口縁部は強く外反する。



O IV:—14類 55—24 口径15.2 最大径16.0 底径5.2 器高16.1cm

O I—15類系のもの。胴部は長胴化し、口縁部は外反する。胎土は細粗粒砂を多含する。2次加熱。

5 大形壺



O IV:—15類 38—15 口径 器高

O II—15類系のもの。径は図よりやや小さくなるものと思われる。頸部は僅かに内傾してから立ち上がる。

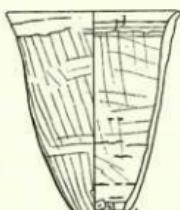
6 壶



O IV:—16類 55—33 口径19.2 底径4.4 器高33.6cm

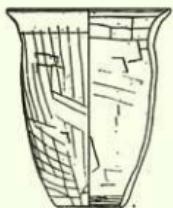
O II—17類系のもの。寸胴な器形となる。頸部の径も広くなる。口縁部は「へ」の字状に開く。底径は小さく、やや突出気味となる。2次加熱で器面の荒れが著しい。口縁部横ナデ、直下斜位、胴部縱位、下端斜位の箇削り。内面木口ナデ。

7 梵



O IV:-17①類 55—45 口径25.3 孔径7.4 器高29.3cm

底部から口縁部まで、ほぼ直線的に開き、ラッパ状を呈する。やや大形。外面縦斜位の篦削り、内面も縦位の篦ナデつけ。2次加熱。



O IV:-17②類 55—43 口径24.0 孔径9.8 器高28.4cm

O II-18②類系のもの。胴上半がややふくらむ。口縁部は長く、外反し先端は立直氣味となる。2次加熱。



O IV:-18類 55—42 口径20.0 孔径3.6 器高18.8cm

O II-19類系のもの。器高が高くなる。孔のつくり方は18類と同じ。口縁部は外反する。内面は丁寧に木口ナデされる。

鬼高第Ⅳ期 (O IV_a) 7世紀後期

第14・15・24・26・35・42・49・51号住居跡

1 瓶 1・2・4・5類の胎土はほとんど同一で、精製された粘土に酸化鉄、角閃石などの微細粒砂を含み、焼成は甘く、軟質で粉っぽい。

O IV_a-1 ①類 14-3 口径12.2 器高4.4cm

底部の器高の方が高い。境の稜は暖昧となり、比較的短い口縁部は外反する。明橙褐色。内黒（炭素吸着）。

O IV_a-1 ②類 35-1 口径12.2 器高4.4cm

口縁部と底部の器高はほぼ同じで、比較的短い口縁部が「ハ」の字状に開くもの。最も数の多い器種である。胎土は①と同じ。

O IV_a-2 ①類 26-1 口径11.7 器高4.4cm

底部の器高は低くなり、口縁部は立直気味に開くもの。稜は小さくなる。胎土は1①類に似るがやや硬質。口縁部横ナデ、底部は中心から周辺への範削り、内面範ナデつけ。

O IV_a-2 ②類 26-5 口径11.3 器高4.7cm

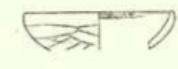
口縁部が2①類より長くなりその分器高が高くなる。境の稜は暖昧となる。胎土は2①よりも軟質である。

O IV_a-4 類 26-7 口径15.5cm

大形。境の稜は丸くなり、口縁部は一度大きく開いて立ち上がり丸味をもった段となし、更に開く。

O IV_a-5 類 26-2 口径11.8 器高4.4cm

底部の器高は低く、口縁部は暖昧な段をもって開く。胎土は1類と同じ。焼成はやや良い。

O IV_a-6 類 24-4 口径10.4cm

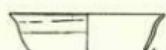
IV-6の系統のもの、小形となる。口縁部直立。胎土は3類と同じ。焼成も比較的良好。

2 皿

O IV_a-7 類 26-8 口径15.8cm

口径対器高は約5:1となる。底部と口縁部の境に小さい稜をもち、口縁部は強く外反して先端はやや起き上がる。胎土は6類と同じ。橙褐色。口縁部横ナデ、底部範削り。

3 鉢



O IV:—8類 26—12 口径22.4cm

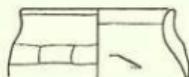
境の稜は小さく、口縁部は大きく外反する。胎土は1類同様粉っぽい。明橙褐色。

4 小形壺



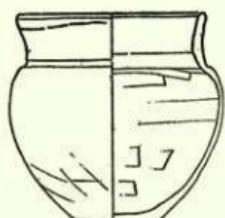
O IV:—9類 26—11 口径10.6 底径6.6 器高10.8cm

O IV:—12①類系のもの、底径は広くなり、胴上半に最大径をもつ。胎土は7類に似るが、細粒砂を多く含み、焼成良く焼きしまる。器肉は厚い。



O IV:—10類 26—10 口径10.8cm

胴部は9類と似るが、口縁部は直立気味に外反する。胴部と口縁部の境に小さい稜をもつ。胎土・焼成は7類とほぼ同じ。橙褐色。



O IV:—11類 24—5 口径13.2 最大径15.3 底径6.2 器高15.0 cm

底部はほとんど平坦で、胴部は上半に最大径をもつ。境に段をもって長い口縁部は直立気味に開く。胎土には角閃石、浮石などの細粒砂を多く含む。焼成良。

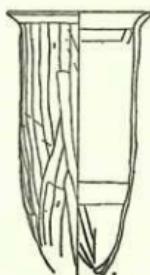
5 大形壺



O IV:—12類 26—13 口径19.4cm

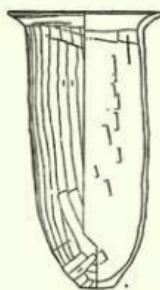
O IV:—15類系のもの。肩部はなだらかとなり、段をもって口縁部は直立気味に外反する。口縁部は比較的短い。胎土は10類に似るが、焼成は非常に良く焼きしまる。しっかりしたつくり。橙褐色。

6 瓢



O IV:—13①類 26—17 口径20.6cm

O IV:—15類系のもの。胴部は更に長胴化し、頸部はほとんど括れをもたず、短い口縁は「ハ」の字状に開く。胎土には角閃石・雲母などの細粒砂の他、石英、片岩などの粗粒～小石を多含、焼成比較的良い。橙茶褐色。



O IV:—13②類 26—15 口径22.1 胴径17.0 底径5.0 器高40.0 cm

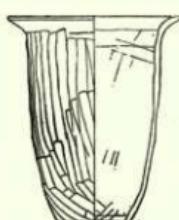
胴部の形態は①類と同じ。口縁部は長く、大きく開く。胎土も含有物は同じであるが、小石の量は少なく、やや軟質。橙褐色。

7 瓶



O IV:—14①類 26—19 口径19.2cm

O IV:—17①類系のもの。径はやや大きくなるものと思われる。角閃石、酸化鉄などの細粒砂の他、粗粒砂を多量に含む。焼成良く焼きしまる。淡橙褐色。



O IV:—14②類 14—7 口径24.7 胴部径最大19.8 孔径10.2 器高29.7cm

O IV:—17②類系のもの。胴部は再び寸胴となり、器高も高くなる。頸部ではほとんど括れず、口縁部は強く開く。胎土には酸化鉄・浮石・角閃石などの微粒砂を多く含み密で焼成も良い。赤彩か？ 内面黒色。口唇部内面は黄褐色～赤茶褐色、外面橙褐色。

8 小形瓶



O IV-15類 24-6 口径17.6 底径5.6 孔径1.5~2.0
器高11.0cm

O IV-19類系の鉢形瓶であるが、多孔となる。器高は逆に低くなる。胎土には角閃石・酸化鉄などの微粒砂と石英、片岩などの粗粒砂を多く含む。焼成も比較的良い。孔は焼成前に外側から開けられる。内面は木口ナデつけにより、平滑となる。

鬼高第V期（O V）7世紀後期

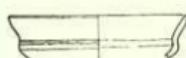
第1・8・62・64号住居跡

1 坯



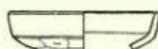
O V-1①類 1-3 口径12.3 器高4.0cm

器形は再び扁平となる。底部の方が器高は高い。境の稜は曖昧で、短い口縁部が開く。胎土、焼成ともO IV-1類と同じ。



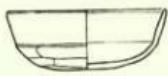
O V-1②類 64-1 口径12.9cm

境の稜は丸味をもち、口縁部は一度内傾して「ハ」の字状に開く。胎土、焼成とも①と同じ。



O V-2類 64-2 口径10.8cm

境の稜は丸味をもち、口縁部は直立気味に開く。小形。胎土・焼成は1①類と同じ。



O V-3類 62-1 口径11.4 器高4.2cm

O VI-2②類系のもの。口径は僅かに広く。やや扁平な器形となる。胎土・焼成とも①類と同じ。淡橙褐色。



O V-4①類 1-1 口径13.2 器高4.5cm

O IV-7類系のもの。再び大形となる。口縁部はやや内湾する胎土は精製され非常に細かい。浮石、角閃石、酸化鉄、雲母などの微粒砂と粗粒砂を僅かに含む。焼成はやや甘い。口縁部横ナデ、底部外縁削り、内面木口ナデ。つくり、整形とも丁寧。



O V-4②類 1-2 口径12.8 器高4.7cm

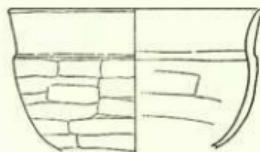
底部は僅かに突出する。口縁部は直立気味となり、①よりやや器高は高い。胎土・焼成とも①と同じ、内面に暗文が施される。

2 鉢



O V-5類 1-5 口径18.0 器高(推定) 7.8cm

O VI-8類系のもの。口径は小さく、器高が深くなる。底部は中央が突出し、器肉も薄い。境に稜をもち口縁部は一度内傾してから「ハ」の字状に開く。胎土・焼成ともO IV-8類と同じで粉っぽい。明橙褐色。赤彩か？



O V-6類 62-3 口径17.9cm

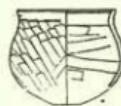
5類と口径は同じであるが、器高は高くなる。境に段をもって長い口縁部は直立気味に開く。胎土も5類に似るが、酸化鉄の微細粒砂を含み焼成も比較的良い。淡橙褐色。内面赤彩か？

3 小形壺



O V-7類 1-6 口径8.8cm

非常に小形。器肉厚い。胴部のふくらみは僅かで、境に段をもって短い口縁は外反する。口縁部は先端が肥厚する。胎土には角閃石・酸化鉄・浮石の微細粒砂を含み、焼成良く焼きしまる。



O V-8類 1-7 口径14.2 最大径16.8cm

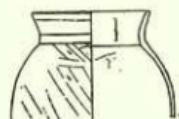
最大径を胴中位にもち、上下に同様の窄りをみせる。頸部の括れは暖昧で、口縁部は直立気味に開く。内面に一条の沈線が回る。胎土には角閃石の細粒砂が目立つ。その他、浮石・酸化鉄などの細粒砂を含む。焼成は良く焼きしまる。7類よりも粗い。



O V-9類 1-12 口径18.8 最大径20.0 器高23.2cm

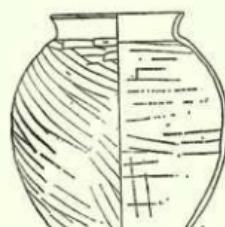
やや大形。底部は丸くなる。胴部は上半に最大径をもち、卵形となる。頸部は括れ、口縁部は大きく外反し、先端は僅かに立ち気味となる。胎土・焼成とも8類に似る。2次加熱。

4 大形壺



O V-10類 1-11 口径16.8 最大径23.6cm

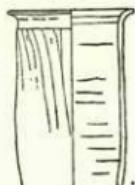
やや小形。胴部は球形。頸部は直立し、口縁部は開き、先端はやや直立する。胎土には、赤色粒、角閃石、浮石などの細粒砂を多含。2次加熱のため内外面荒れる。つくりは比較的丁寧。



O V-11類 1-8 口径19.2 最大径30.8cm

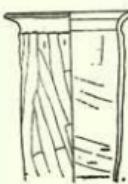
O V-13類系のもの。口縁部はなめらかに外反する。胴部は比較的長い。胎土には角閃石、浮石、酸化鉄などの微粒砂と、片岩、石英などの粗粒砂、小石を含む。焼成やや甘い。橙赤褐色。

5 瓢



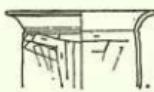
O V—12①類 1—18 口径20.2 腹径18.4cm

O IV—14①類系のもの、腹部は小さくなる。口縁部は強く外反する。胎土には角閃石、酸化鉄、浮石などの細粒砂と、酸化鉄などの粗粒～小石を含む。つくり整形とも雰。2次加熱。



O V—12②類 1—17 口径18.4 腹径15.2cm

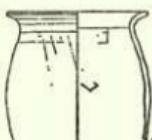
O IV—14②類系のもの。①と同様の変化をする、胎土に含まれる砂粒は①類のものより粗い感じ。焼成は良い。2次加熱。



O V—12③類 1—15 口径22.0 腹径17.2cm

腹部の径は前者より大きくなり、つくりも丁寧で器肉薄い。口縁部は外反し、先端は強く屈曲する。胎土には角閃石、浮石などの微粒砂と、片岩、石英、酸化鉄などの細粗粒砂を含む。焼成良く焼きしまる。口縁部赤彩か？

6 瓶



O V—13類 1—13 口径20.4 最大径20.8cm

腹部には丸味をもつ。頸部はやや括れ、口縁部は強く外反する。胎土には酸化鉄、浮石、角閃石などの微粒砂と、片岩、石英の小石を含む。焼成甘く軟質。橙褐色、内面腹部黄褐色。

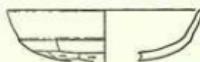
真間第1期 (M I) 7世紀末葉～8世紀初頭

第3・5・9・19・33・37・43・58号住居跡

土師器の胎土、焼成の変化が特徴的である。胎土には微～細粒の均一の砂粒が多く含まれるようになり、焼成は非常に良くなる。

土師器

1 壺



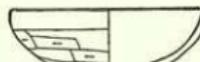
M I-1類 58-1 口径14.0cm

鬼高窯の特徴を留めるものである。稜は小さくなる。内外面赤彩。胎土には角閃石・浮石・酸化鉄などの微～細粒砂を含み焼成も良い。橙褐色。



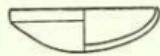
M I-2類 58-7 口径11.8 器高3.4cm

当期に特徴的な壺。扁平な丸底から腰をもたずに短い口縁部は僅かに内湾する。器肉は薄く焼成も良いが、やや器形が歪むので、口縁部の形態は種類に富む。橙褐色。口縁部整形の横ナデ後、外面は底部中央から周辺に向って笠削され、口縁部直下まで達していない。間は、粗い笠ナデつけが施される。焼成非常に良く硬質。



M I-3類 58-8 口径14.0 器高4.8cm

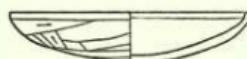
O V-②類系のもの。やや大形。口縁部横ナデ直下から外面笠削りされる。微細粒砂含む。焼成良、橙褐色。



M I-4類 58-3 口径10.6 器高3.2cm

O V期8住の壺と同様小形である。胎土や手法は1類と同じであるが、口径が11.5cm以下をもつてこの類とする。

2 盆



M I-5①類 58-9 長径18.1 短径17.5 器高3.65cm

きれいな椭円形を呈する。扁平な丸底から短い口縁部は直立する。胎土・焼成は2類と同じ。橙褐色。



M I-5②類 33-3 口径12.9 器高2.9cm

2類に似るが、扁平で、口径対器高が4:1かそれより口径の大きいもの。



M I-6類 58-10 口径20.6 器高3.8cm

底部と口縁部の境は、口縁部横ナデ後の底部笠削りによつて段をなす。比較的短い口縁部は微かに内湾して開く。内外面赤彩か？ 橙褐色。

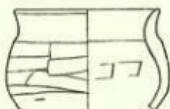
3 塚



M 1-7類 58-11 口径17.2 器高6.35cm

底部は深く丸味をもち、非常に短い口縁は内湾する。口縁部横ナデ後、底部から口縁直下まで箒削りされる。胎土、焼成2類と同じ。

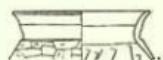
4 小形壺



M 1-8類 43-21 口径10.4cm

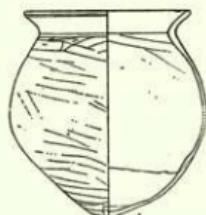
小形で器肉厚く、胸部中位の最大径から直線的に頸部へと窄まり口縁部は僅かに開いて直立する。胎土・焼成は2類と同じ。

5 大形壺



M 1-9①類 20-13 口径19.4cm

肩部は直線的に開き、口縁部は中位に鈍い稜をもって外反する。胎土は精製され、微細粒砂を多含し、焼成は非常に良く堅緻である。口縁部は最底2回の横ナデが施される。外面横位の箒削り、内面木口ナデつけ。



M 1-9②類 33-7 口径23.6 底径2.8 器高(推定)29.6cm

②より大形で、口縁部は「く」の字状に開く、胎土には酸化鉄が目立つ。焼成はやや甘い。

6 壺

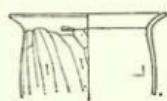


M 1-11類 20-15 口径20.0cm

胸部には僅かにふくらみをもち、口縁部は強く外反する。胎土には角閃石、浮石、酸化鉄などの微細粒砂を多く含み、僅かに片岩などの粗粒砂を含む。焼成良好焼きしまる。橙褐色。2次加熱。

M 1-12①類 58-13 口径22.6cm

胸部には僅かに丸味をもち、口縁部は「ハ」の字状に開く。胎土は11類に似るが、やや砂粒は細かく、その他に小石を僅かに含む。焼成良好焼きしまる。2次加熱。





M I - 12 ②類 58-14 壁最大径18.8cm

器肉薄く丁寧なつくり。胎土は11・12類よりも精製された感じで、砂粒が細い。角閃石、酸化鉄、浮石などの微～細粒砂の他に石英などの粗粒砂を僅かに含む。橙赤褐色。口縁部横ナデ後、器外面は縦斜位に削り下される。

真間第Ⅱ・期 (M II.)

第2・10・52・54号住居跡

1 坯



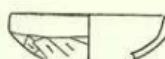
M I - 1 類 54-2 口径11.7 器高3.4cm

M I - 2 類系のもので、口径が11.6cm以上のもの。胎土はM I - 2 類に似るが、焼成やや甘い。口縁部横ナデ整形後、外面底部より口縁部直下まで範削りされる。



M II - 2 類 54-13 口径15.0 器高4.6cm

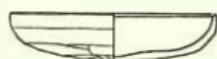
M II - 3 類系のもの。大形で底部は扁平となる。口縁部は内湾して直立する。胎土、手法ともM I - 2 類と同じ。



M II - 3 類 54-19 口径11.0

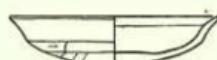
M I - 4 類系のもの。胎土、手法などもM I - 4 類と同じ。

2 盆



M II - 4 類 10-4 口径14.9 器高3.4cm

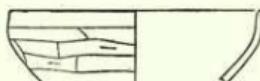
M II - 5 類系のもの。胎土・焼成はM I - 2 類と同じ。



M II - 5 類 54-17 口径15.0 器高3.5cm

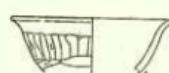
M I - 6 類系のもの。やや小形となる。底部は扁平となり、口縁部は外反する。胎土・焼成はM I - 2 類と同じく微細粒砂を多く含み、焼成良く焼きしまる。橙褐色。

3 鉢



M II - 6 類 54-15 口径17.9cm

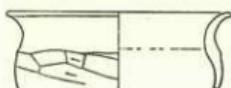
体部は直線的に開いてから、内湾して立ち、口縁部は外反気味に直立する。胎土には砂粒少なくやや軟質。淡橙褐色を呈する。



M II - 7 類 57-21 口径11.6cm

体部には僅かに丸味をもち、短い口縁部が外反する。器肉は厚いが、5 類と同様の胎土で焼成も良く焼きしまる。口縁部横ナデ後外面縦位の範削り、以下横斜位に範削り。明橙褐色。

4 小形壺



M II-8 類 54-27 口径10.7cm

肩部にはほとんど張りを持たず、口縁部は強く外反する。胎土・焼成はI-8②類と同じ。橙茶褐色。外面暗褐色。

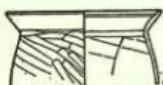
5 大形壺



M II-9 類 54-22 口径20.8cm

肩部は丸味をもって大きく開く。口縁部は一度立ち上がってから「ハ」の字状に開き、更に外面には緩い棱をもって立ち気味となる。器内は薄く、胎土には歯～細粒砂を多含する。焼成も良い。口縁部巻き上げ痕が残る。赤茶外面に褐色。

6 瓢



M II-10 類 10-7 口径22.3cm

胴部はややふくらむ。頭部で括れ「ハ」の字状に開き、上部でやや内湾する。胎土、焼成は9類と同じ。赤茶褐色。口縁部横ナデ後肩部外面は横～斜位の範削りが施される。

真間第II期 (M II-4)

第28・29・53・57号住居跡

1 杯



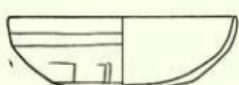
M II-1 類 29-3 口径13.9cm

M II-1 類系のもの。やや大形となる。



M II-2① 類 53-14 口径17.9 器高5.6cm

M II-2 類系のもの。大形となる。



M II-2② 類 29-5 口径16.3 器高5.4cm

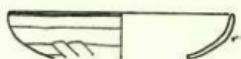
①類より小形で底部は範削り調整によって角をもつ。



M II-3 類 50-10 口径13.8 器高4.45cm

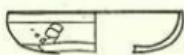
丸底で口縁部が直立するもの。やや大形。胎土、整形は1類に似てやや甘くなった感じ。ほぼ同一規格のものが53号住にまとまって4個体出土している。

2 盆



M II r—4 ①類 29—6 口径16.0cm

M II r—4 類系のもの。



M II r—4 ②類 29—1 口径12.4cm

①より小形のもの。平底で口縁部は直立する。

M II r—5 類 29—4 口径20.0cm

M II r—5 類系のもの。M I—1 類の胎土、焼成のものである。
砂粒多く比較的硬質。

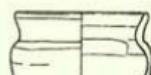
3 塚



M II r—6 類 28—8 口径15.0cm

M II r—6 類系のもの。やや小形となる。胎土、焼成はM I—3 類に似る。

4 小形壺



M II r—7 類 28—13 口径9.4cm

M II r—8 ①類系のもの。非常に小形。胎土、焼成はM I—8 ②類と同じく、真間期に特徴的なものである。

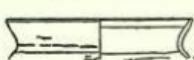
M II r—8 類 22—14 口径13.2cm

M I—8 ①類系のもの。胎土は非常に密で焼成の甘い粉っぽい土器。明褐色を呈する。

M II r—9 類 29—7 口径14.0cm

胴部がふくらむ器形となる。口縁部中位に段をもつ。胎土・焼成はI—8 ②類と同じ。

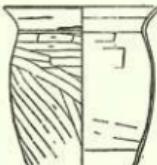
5 大形壺



M II r—10 類 7—3 口径26.8cm

頸部の径は大きい。口縁部は一坦開き、先端はやや立ち気味となる。

6 壺



M II r—11 類 29—8 口径22.2cm

M I—12 ①類系のもの。肩部の張りは強くなり、器高はやや低くなる。口縁部は大きく「く」の字状に外反する。

真間第Ⅲ期 (M Ⅲ)

第57・60号住居跡

1 瓶



M Ⅲ-1 類 60-1 口径13.9cm

扁平な器形となる。丸底から稜をもって短い口縁部は外反する。口縁部横ナデ後、外面直下まで範削り、内面は口縁部横ナデ後0.3～0.4mm幅の細い暗文が施される。胎土には角閃石、浮石、酸化鉄などの微～細粒砂を少な目に含む。焼成普通。

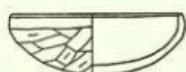
M Ⅲ-2 類 60-4 口径12.1cm

M Ⅲ-1系のもの。



M Ⅲ-3 ①類 60-5 口径11.8cm

2類より大形で器高が高い。口縁部は内湾気味に立つ。



M Ⅲ-3 ②類 60-6 口径12.3cm

①よりも深い。胎土も砂粒の量少なく密である。器肉はやや厚い。焼成良く焼きしまる。M Ⅲ-3類系のものである。



M Ⅲ-4 類 60-7 口径11.7cm

2類よりも器高が低く、口縁部が直立するもの。胎土、焼成、手法は2類と同じ。



M Ⅲ-5 ①類 60-9 口径12.0 底径8.2 器高4.1cm

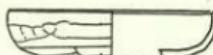
須恵器の瓶を模倣したもの。底部は平坦となり、体部と口縁部が意識されて分かれるもの。器高は高く、口縁径対器高比は約3:1となる。胎土は2類と同じ、器肉は非常に薄く、焼成良く焼きしまる。口縁部横ナデ整形。外面、底部と体部は範削り。内面は器面磨滅のため整形痕不明。



M Ⅲ-5 ②類 60-8 口径11.4 底径7.9 器高3.4cm

①類より小形となる。胎土は精製され、浮石、角閃石、酸化鉄などの超微粒砂を多含し、石英の細粒砂を僅かに混入する。焼成も良い。整形は①類とはほぼ同じであるが、体部外面は粗く横位に磨かれ光沢をもつ。内面は磨かれず、暗文が施される。図示しなかったが底部と体部の境の曲の部分から底部にかけての部分にも46往18と同様の曲線が描かれている。

2 皿



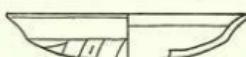
M II:—6類 60—11 口径14.7cm

M II:—4②類系のもの。胎土、焼成は2類と同じ。



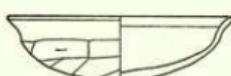
M III:—7①類 57—1 口径20.8cm

M I:—6類系統のもの。器高はやや低くなる。胎土・焼成は3②類と同じ。



M III:—7②類 60—13 口径17.5cm

小形で、口縁部は外反する。胎土、焼成は2類と同じ。



M III:—7③類 60—12 口径16.4cm 器高4.7cm

器高は高くなる。器形は歪み、図示した部分は短径に近い。短径約16.0cm、長径17.2cm。胎土、焼成は2類のものと同じ。

3 壺



M II:—8類 60—10 口径14.0cm

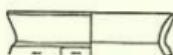
M II:—6類系のもの。やや小形となる。胎土、焼成は2類と同じ。

4 小形壺



M III:—9①類 60—15 口径13.8 器高12.1cm

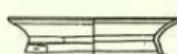
M II:—7①類系のもの。非常に小形、丸底で緩い稜をもち、口縁部は一度内傾して上端で外反する。胎土・焼成は2類に似るが、僅かに小石を含む。口縁部は最低2回なでられる。外面は口縁部直下から底部へ向って笠削り、内面口縁部直下は木口状工具による強いナデつけが一層する。以下も木口なで。



M III:—9②類 60—16 口径12.0cm

M II:—8①類系のもの。胎土、焼成は①類と同じ。

5 大形壺



M III:—10類 60—21 口径24.8cm

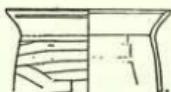
M II:—9類系のもの。この資料は残存率6%と小片であったこともあり、図の傾きは間違いである。口縁部はもっと直立するものと思われる。薄手で焼成でも良い。胎土、焼成は2類と同じ。

6 壺



MII-i—11類 60—20 口径19.0cm

MII-i—9類系のもの、この資料も小片で、ちょうど歪む部分に当っているため、径はやや大きくなるものと思われる。胎土は2類とほぼ同様であるが、僅かに砂粒の量少ない。やや厚手で軟質。



MII-i—12類 60—17 口径23.8cm

MII-i—10類系のもの。肩部の張りは少ない。口縁部は最低2回に亘りナデられる。肩部外面は横筋削り、胎土・焼成は11類と同じ。

真間第Ⅲ期 (MII-r)

第6号住居跡

1 壺



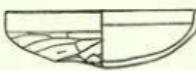
MII-r—1類 6—4 口径12.2 器高3.5cm

MII-r—2類系のもの。



MII-r—2類 6—5 口径12.8 器高4.2cm

MII-r—3②類系のもの。胎土・焼成とも同系で、やや分厚く、砂粒の量少なく焼成も良い。



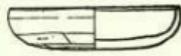
MII-r—3類 6—6 口径13.9 器高4.1cm

やや大形。扁平な丸底から口縁部は直立する。胎土には、角閃石、浮石、雲母などの微粒砂と極く希に粗粒砂を含み、滑らかな感じとなる。薄手。



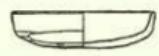
MII-r—4類 6—3 口径11.0 器高3.2cm

MII-r—4類系のもの。30%の小片で屈曲している部分のため口径は12~13cmの間になるものと思われる。胎土は3類に似るが、やや粗い。焼成良。



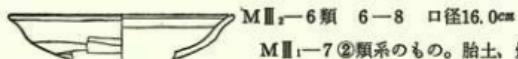
MII-r—5①類 6—2 口径12.1 器高3.1cm

MII-r—6類系のもの。径はやや大きくなるものと思われる。胎土・焼成は4類と同じ。淡橙褐色。



MII-r—5②類 6—1 口径10.2 器高2.6cm

5①類より1形のもの。20%の小片で屈曲部のため図では径が小さくなる。12cm前後になるものと思われる。胎土は①類と同じ。焼成はくすべ焼で黒褐色を呈する。



M III 2-6 類 6-8 口径16.0cm

M III 1-7 ②類系のもの。胎土、焼成とも同じ。

2 壺



M III 2-7 類 6-7 口径15.7 器高5.3cm

M III 1-8 類系のもの。底部と口縁部の境に緩い稜をもち口縁部は内湾して立つ。器肉は薄く、胎土は密であるが角閃石(目立つ)浮石、雲母などの微粒砂を比較的多く含む。明橙褐色。焼成も良い。

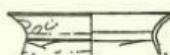
3 小形台付壺



M III 2-8 類 6-10 口径14.2cm

口縁部は梢円形となり、図は長径である。短径約13.8cm長径14.8cm。台との接合部は正円である。胎土には、浮石、角閃石、雲母、その他の細粒砂を多含、その他に酸化鉄、石英などの粗粒砂へ小石をわずかに含む。焼成良、臺部の器高は低く、胴上半に最大径をもつ。口縁部は一度内傾して外反する。台部接合部の径は6.6cmと広く安定感がある。2次加熱。

4 壺



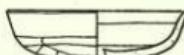
M III 2-9 類 6-11 口径23.8cm

M III 1-11 類系のもの。器肉は薄い。胎土には角閃石、浮石、酸化鉄、石英などの微粒砂を多含し、焼成も良く焼きしまる。橙茶褐色、胴部黒褐色。12と同一個体、口縁は11類に近い。また13も同一個体と考えてよい。

真間第IV期(M IV)

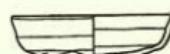
第18号住居跡

1 坯



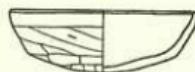
M IV 1-1 類 18-3 口径11.7 器高3.4cm

M I 1-1 類系のもの。稜はほとんどなくなるが、胎土・焼成は同じ。



M IV 2-2 類 18-2 口径12.8 器高3.5cm。

M III 2-1 類系のもの。底部は平坦に近くなり、稜をもって体部は開き、口縁部は僅かに内湾して更に開く。胎土には微粒砂を混入し、焼成も良い。薄手。



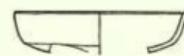
MⅣ-3①類 18-1 口径13.1 器高4.4cm

大形で底部中央はやや突出する。稜は笠ナデつけによって不明瞭となる。体部は大きく開き、口縁部は内湾する。胎土には角閃石、浮石などの微粒砂を含み密で、焼成色く硬質。淡暗橙褐色。口縁部横ナデ整形、底部笠削り、体部笠ナデつけ。



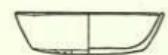
MⅣ-3②類 18-4 口径11.3 器高3.4cm

①類より小形。胎土は①類より粗くやや軟質。橙褐色。



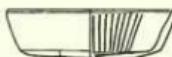
MⅣ-4類 18-5 口径12.3cm

MⅡ-4類系のもの。口縁部の器高は高くなり、やや外傾する。胎土、焼成はMⅢ-3②類と同じ。



MⅣ-5①類 18-6 口径10.7 器高3.0cm

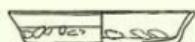
MⅡ-5①類のもの。小形となる。器形はやや歪む。体部下半に笠削りは認められない。胎土、焼成ともMⅢ-3②類と同じ。



MⅣ-5②類 18-7 口径11.9 器高3.4cm

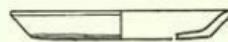
MⅡ-5②類のもの。つくり、整形とも丁寧であるが、胎土、焼成は3②類と同じである。整形は口縁から体部まで横ナデ整形。底部はナデ様笠削り、内面体部に放射状の、底面に曲線の暗文が施される。

2 皿



MⅣ-6①類 18-8 口径13.2 器高2.6cm。

底部は扁平で体部は直立し、口縁部はやや内湾気味となって開くもの。胎土はMⅢ-3②類に似るが、焼成は良い。薄手。橙褐色。



MⅣ-6②類 18-9 口径16.0 器高2.0cm。

底部と口縁部の境には緩い稜をもつ。口縁部横ナデ、底部ナデ様笠削り。底部はほぼ平坦で口縁部は「ハ」の字状に開く。器肉はやや厚く、胎土は1類に似る。焼成は良い。橙茶褐色。

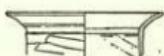
3 大形壺



MⅣ-7類 18-13 口径8.9cm

肩部には丸味をもち、口縁部は一度内傾気味に直立してから内湾気味に開く。非常に薄手、口縁部は6%しか残存しないので、口径はやや大きくなるものと思われる。胎土には超微粒砂～微粒砂を多く含み、焼成も非常に良い。明橙褐色。

4 壺



MIV-8類 18-10 口径11.2cm

MII-11類系のもの。口縁部直下の箇削りを行ったあともう一度頸部を横ナデしている。胎土には、角閃石、石英、浮石、酸化鉄粒の細粒砂を多含する。焼成良く焼きしまる。内面はくすべ焼きによって黒色となる。外面淡橙褐色。胴下方は2次加熱で、黒褐色～朱色。



MIV-9類 18-12 口径10.6cm

肩部には丸味を持ち、頸部が長くなり、口縁部はやや長く「ハ」の字状に開く。口縁部外面に巻き上げ痕、口縁部と頸部の横ナデ整形後、肩部外面横位の箇削り。器肉は薄い。胎土には角閃石(多い)浮石、酸化鉄、雲母などの微粒砂を多含。焼成良く焼きしまる。淡暗橙褐色。



MIV-10類 18-11 口径9.0 胴部最大径20.4cm

9類より小形。頸部は直立気味となり、口縁部は短くなる。つくりは9類と同じ、胎土には浮石、酸化鉄が目立ち、その他角閃石などの微粒砂と小石を僅かに含む、焼成も良く焼きしまる。内外面全体明橙褐色。

真間第V期 (MV)

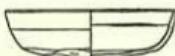
第7・17・34号住居跡

1 坯



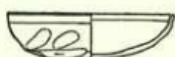
MV-1類 17-1 口径11.5 器高3.6cm

MIV-1類系のもの。しかし胎土、焼成は、この時代特有のもので、微細粒砂を多く含み、焼成良く焼きしまる。小形で、口縁部も短くなる。橙褐色。



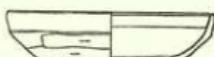
MV-2①類 17-5 口径12.3 器高3.4cm

MIV-2類系のもの。量が多く、やや深目のものもある。胎土、焼成1類と同じ。



MV-2②類 17-2 口径11.9cm 器高3.3cm

つくりは①類とはほぼ同じであるが、口縁部が短く直立～外傾する。胎土、焼成も①類と同じ。



MV-3①類 17-10 口径14.8 器高4.2cm

MIV-3①類系のもの。大形で扁平な器形となる。底部と体部の境は、体部横位の箇削りによって、明瞭となる。胎土には、砂粒の量少なく、浮石、角閃石、酸化鉄、雲母の微粒砂と、細～粗粒砂を少量含む。焼成良。橙褐色。